令和５年度子育て世代の日常生活に関するインサイト*分析委託

最終報告資料

提出日：2024年2月28日(水)
委託者：横浜市政策局政策課
作成者：株式会社リ・パブリック

***インサイトとは**

インタビューや観察などの調査から導出される個人の行動や態度の深層にある無意識の心理・本音を簡潔にまとめた文章で、新しい発想のヒントとなるもの。

参考｜01

CONTENTS

1. 調査概要

1. 本調査の目的とアプローチ p. 4
2. 公共政策の立案プロセスにおける定性調査の位置付け p. 5

2. 調査のプロセスとその手法

1. 本調査のプロセス p. 7
2. 専門家インタビュー p. 8
3. オートエスノグラフィ p. 10

3. 子育ての社会背景と課題

1. 日本における子育ての社会背景 p. 18
2. 子育て政策の変遷 p. 19
3. 横浜市民の日常から見えてきた子育ての課題領域 p. 21

4. 調査から得られたインサイト

1. インサイトの導出プロセスと一覧 p. 24
2. インサイト p. 26
3. インサイト分析 p. 35

5. 機会領域の探索

1. インサイト分析から見えてきた子育て支援方針 p. 38
2. 具体的な支援施策の検討 p. 43
3. まとめ p. 48

6. 参考

1. 専門家インタビューの詳細 p. 52
2. 参考事例 p. 57
3. 参考文献 p. 62

1. 調査概要

1.1　本調査の目的とアプローチ　p. 4
1.2　公共政策の立案プロセスにおける定性調査の位置付け　p. 5

1.1　本調査の目的とアプローチ

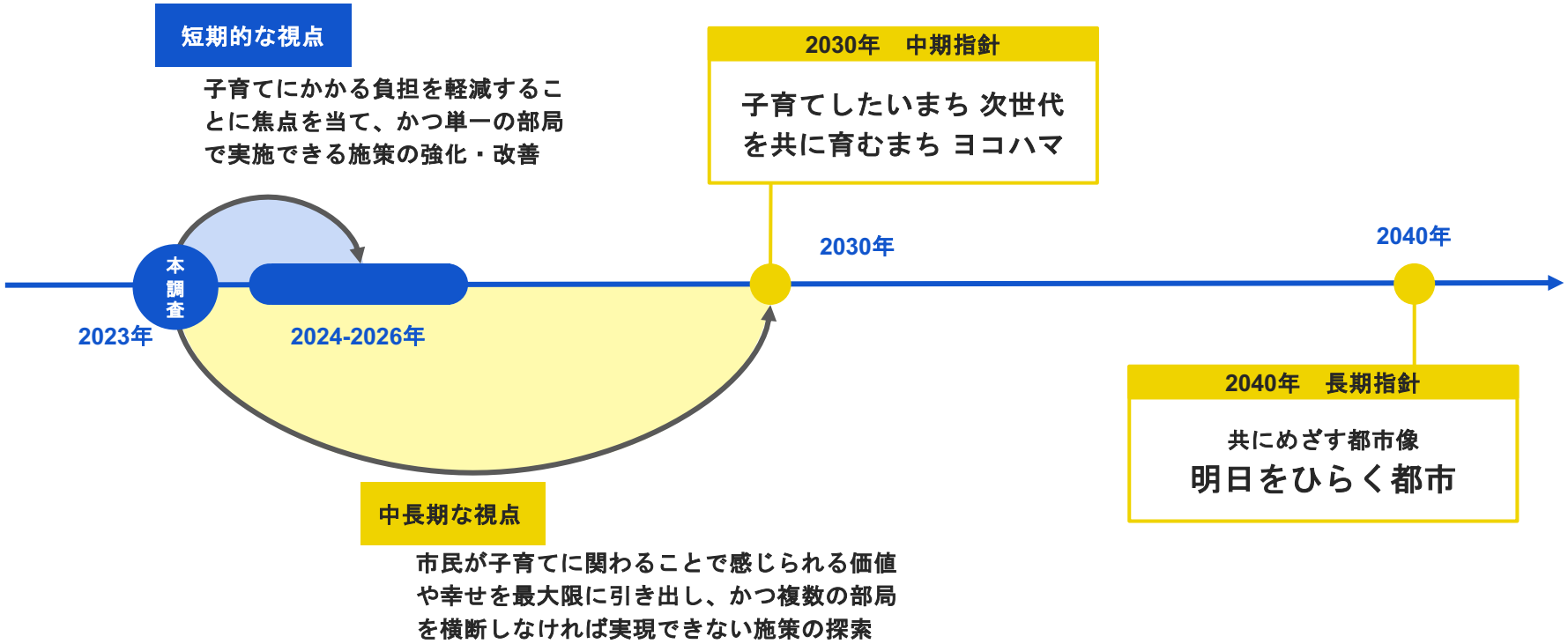
本調査の目的

この調査は、現時点における子育て世帯のニーズを把握するために横浜市が先行して実施してきた定量調査を土台に、「横浜市中期計画2022-2025」で掲げる基本戦略「子育てしたいまち 次世代を共に育むまち ヨコハマ」の実装を念頭においた具体的な施策を検討することを目的に据えている。

本調査のアプローチ

この調査は、横浜市民自らの暮らしを記録してもらうオートエスノグラフィ（自己省察および著述）や専門家に対して実施するインタビューなどの定性的な手法を通して、**横浜市の子育て世代が日常の暮らしの中で抱えている課題や問題意識を可視化するだけでなく、市民の皆さんが限られた資源（特に時間）をいかにやりくりしているかなどの生活の実際を観察する**ことで、先行研究*で明らかになったニーズが「なぜ生じているか」に加えて、潜在的なニーズの解消につながる具体的な施策のヒントを抽出する。また、本調査で抽出されたニーズやヒントは〈解決すべき課題の難易度〉と〈実装に係るステークホルダーの多様さ〉を基準に、**「短期的な視点」と「中長期的な視点」の２軸を設定し整理することで、より段階的で効果的な実装に向けた足場づくり**を目指す。

*「令和４年度 子育て世帯に優しい施策の検討に向けた調査」、「家庭と子育てに関するコホート研究：ハマスタディ Wave 1」



1.2　公共政策の立案プロセスにおける定性調査の位置付け

定性調査とは？

定性調査とは、社会現象を調査対象として、なるべくその現象が普段起きる環境の中で深く理解しようとする探求のプロセス。**社会現象の「WHAT 何か」よりも「WHY なぜ」の側面に焦点を当て**、日々の暮らしの中で人びとがどのような意味づけを行いながら生きているのかを、**対象者の直接的な経験に依拠しながら調査する**。定量調査とは異なり、統計的な手続きによってではなく、事例研究、歴史分析、言説分析、エスノグラフィー、現象学など、人間現象の研究に複数の調査体系を用いる。

世界の潮流：定性調査が公共政策の立案プロセスの欠かせない一部に

ヨーロッパを中心に、世界では2010年前後から、公共政策領域におけるイノベーションを推進するPSIラボ（Public Sector Innovation Labs）と呼ばれる機関が急増している（2016年時点で162機関）。これらのラボでは**定性調査を土台とするデザイン手法を当該領域に適用することで、従来の「トップダウンで線状的、スピードは遅く計画者と実践者が異なる」立案プロセス[1]を、より実験的で刻一刻と変化する状況に機敏に対応可能かつ市民参加型なプロセスにシフトさせることを目的**としている。参考｜02

代表的なPSIラボ

国

- MINDLAB　マインドラボ　デンマーク　2002-2018
- Helsinki Design Lab　ヘルシンキデザインラボ　フィンランド　2008-2013
- TACSI　TACSI　オーストラリア　2009-
- Government Digital Service　Government Digital Service　イギリス　2011-
- PDIS　Public Digital Innovation Space　台湾　2016-

NPO

- PUBLIC POLICY LAB　パブリックポリシーラボ　アメリカ　2011-
- IN WITH FORWARD　In With Forward　カナダ　2013-

出所｜03-09

事例：Family Pathways to Care（ニューヨーク市）

「子どもの健全な発達とウェルビーイングをよりよく支援するために、市の機関はどのようにして公的なメンタルヘルスサービスの紹介経路を調整できるのか」という問いを出発点に、ニューヨーク市に住む家族がメンタルヘルスや治療支援サービスにどのように知り申請するのか、また、申請後はどのような体験をするのかを調査した。結果として、家族や医療提供者の声を聞くための持続可能なフィードバック・チャンネルを作るための戦略を立案することで、各種サービスへのアクセスを拡大し、より多くのシステム横断的な紹介経路をサポートし、申請前から申請後に至るまでの家族の体験を改善した。

参考｜10

2. 調査のプロセスとその手法

2.1　本調査のプロセス　p. 7

2.2　専門家インタビュー　p. 8

2.3　オートエスノグラフィー　p.10

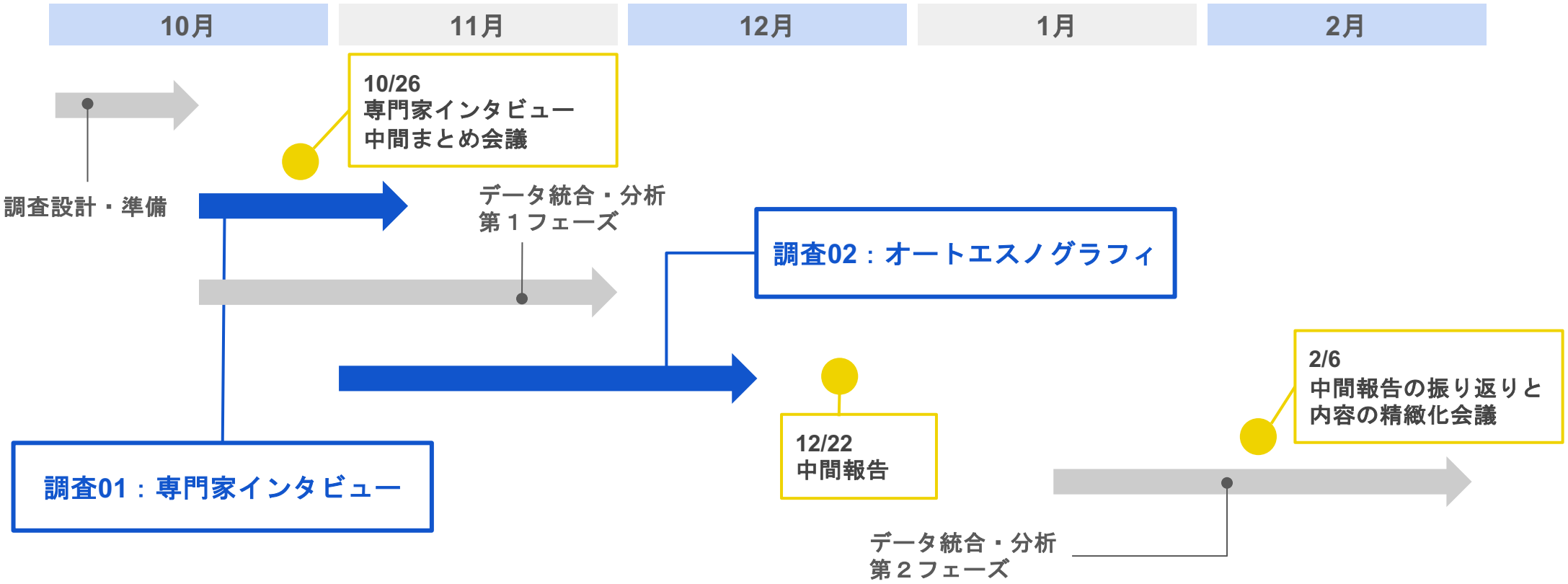
2.1　本調査のプロセス

本調査で採用した調査手法と参加者

	手法	内容	参加者
調査01	専門家インタビュー	子育てならびに周辺領域において専門性を有する実務家や研究者に対するヒアリング	子育ておよび周辺領域有識者：5名 ▶詳細は p. 9
調査02	オートエスノグラフィ	横浜市民を対象にした、参加者自らが普段の環境や行動を観察して記録する文化人類学的手法	横浜市在住の育児者*：10名 ▶一覧は pp. 13-16

*本調査では子育てに関わる世話やケアに焦点を当てるため「育児者」を用いる。

全体スケジュール



2.2　専門家インタビュー

実施目的

専門家インタビューの実施目的としては、オートエスノグラフィの有効性を高めるために、**子育ての社会背景を探るとともに、自助共助の現在地を探った**。

子育てを含むその他の周辺領域（インクルーシブ教育、地域包括ケア、ソーシャルワークなど）において、専門性を有する実務家や研究者に対して、子育ての現状や打開策についてヒアリングし、潜在的なニーズやインサイトを抽出した。インタビューはZoomを使ってオンラインで実施し、合計5名の専門家に対して各1時間半程度のヒアリングをおこなった。

Zoomで実施したオンラインインタビューの様子

専門家インタビューのプロセス

STEP 1

リサーチの視点づくり

デスクトップリサーチにより、子育て政策の変遷や実態に加えて、隣接するケア領域である介護や障害福祉の視点にも対象を広げた。

STEP 2

専門家の選定 / 事前打ち合わせ

次ページの専門家に依頼し、事前に趣旨と、それぞれの専門領域から伺いたい観点を共有した。

STEP 3

質問作成 / インタビュー

質問・インタビューガイドを作成し、1時間半ほどのインタビューをオンラインで実施した。

STEP 4

振り返りワークショップ

インタビューごとにMiro*を活用して要点を整理する個別振り返りに加え、全インタビューを横断したワークショップ形式の振り返りを実施。今後の調査における重要な観点を抽出した。

*オンラインのマインドマッピングツール

振り返りワークショップの様子

2.2　専門家インタビュー

協力者一覧と選定の狙い

専門家、NPO、研究者、当事者など、異なる立場で子育てを見つめてきた観点から、現在の子育て政策に必要な視点の示唆を得た。

インクルーシブ教育
古市 理代 氏

NPO法人アクセプションズ代表理事、ＮＰＯ法人ピープルデザイン研究所理事。薬剤師。社会人の長女と19歳の長男がおり、長男がダウン症をもっている。

障害の社会的受容と変革に取り組むNPO法人理事。当事者として、専門家として取り組んできた、**多様性のある子育て環境作り**について伺う。

保育士起業家
小笠原 舞 氏

合同会社こどもみらい探求社共同代表。asobi基地 代表。神戸市長田区在住の、未就学児2児の母。大学を卒業後、独学で保育士資格を取得。長田ではゲストハウスも運営。

保育の専門家としての子どもの生育環境の視点に加えて、神戸市長田区にて実践する**子育ての地域化・市民参加**について伺う。

医療ソーシャルワーカー
西出 真悟 氏

オレンジホームケアクリニック副院長。社会福祉士・介護福祉士・介護支援専門員。地域とともにつくる医療を理念に居場所づくりも手掛ける。

在宅医療の専門クリニック。**地域づくりと医療福祉、医療的ケア児支援の視点**から、子育てとも共通する、地域におけるケアの課題と可能性を伺う。

社内起業家
大原 徳子 氏

コニカミノルタ株式会社新規事業開発担当。大学生の長男・中２の長女の母。社内子育てコミュニティ「パパママエール」や京都大学との共同研究「Parenting」発起人。

自身の苦労を糧に、子育てサポートのためのサービス開発を手がける。**拡大家族とコミュニティ形成**の視点から、当事者として、専門家としての話を伺う。

社会学者
工藤 遥 氏

拓殖大学北海道短期大学准教授。博士（文学）。「乳幼児家庭に対する地域子育て支援」を主なテーマに研究をおこなってきた。

社会学の専門家として、国内の子育てにまつわる制度的・実態的変遷、国内外比較を通した**家族社会学からみた子育てについて伺う。**

写真すべて本人提供

2.3　オートエスノグラフィ

実施目的

横浜市に暮らす育児者の声から子どものいる生活の実態をなるべく詳細に浮かび上がらせ、どのように日々をやりくりしているのか、どのような悩みや課題を持っているのか、どのような気持ちで育児をしているのかを明らかにすることを目的とした。

調査手法

本調査では、参加者が日々の生活の中で時間の確保が難しい育児者だということをふまえ、**参加者自身が普段の環境や行動を自ら継続的に観察・記述する「オートエスノグラフィ」という調査手法**を採用した。また、参加者が普段から使い慣れているスマートフォンでの記述を可能にするため、LINEを活用し、写真や日々の感情の動きも含めて5日程度記録してもらった。それにより、**第三者による観察では見過ごされがちな経験や視点を拾い上げることができ、その後のインタビューの対話がより深まった**。

記述を促すプロンプト画像

感情起点の記述を簡易化するボタン

対象

横浜市在住で、子どもの数、職業、勤務形態などが多様な育児者10名に対して実施した。対象者の年齢は30代前半～40代前半、乳幼児から小学生くらいまでの子どもがいる家庭を対象とし、専業主婦家庭や共働き家庭、自営業の家庭など、幅広い属性を対象とすることを試みた。

Zoom インタビューの様子

オートエスノグラフィのプロセス

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
事前インタビュー	**オートエスノグラフィ**	**データ整理**	**事後インタビュー・分析**
オートエスノグラフィ参加者にZoomを用いて事前インタビューを行い、参加者の基本情報をお伺いし、対象者シートを作成。同時に、今回のオートエスノグフィの実施内容および方法を説明した。	日々の生活の中で子育てに関して何かしらの感情を感じた際に、LINEアプリを活用し、その理由や背景をテキストや（可能な範囲で）写真で送ってもらった。平日と休日を含む5日間、記述を依頼した。	事前インタビューやLINEの記述（コメントや画像）を時系列に整理し、育児者がどんなものに頼っているかという育児ステークホルダーマップと移動を含めた1日のながれ（p.12参照）を作成した。	STEP3で整理したデータをもとに調査者で、質問項目を洗い出し、Zoomによる事後インタビューを協働して行った。その後、インサイトを導出するための分析をMiroを用いて行った。

2.3　オートエスノグラフィ

LINEによる記述画面の例

記述でアップされた画像の一部

オムツを散らかして遊ぶ

週末に作り置きした離乳食を冷凍して夕飯の準備

月曜日にもっていく大荷物

定期的に届く
ミールキット

親が仕事中に一人遊びに飽きて寝た

ネットで注文する食材

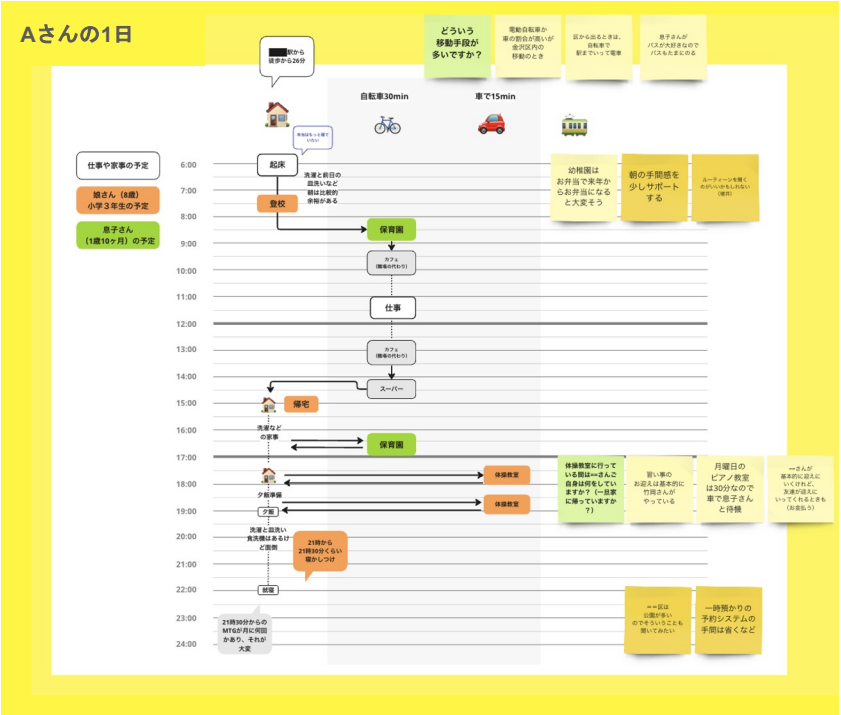
在宅勤務の
合間のネイル

2.3　オートエスノグラフィ

LINEの記述を分析

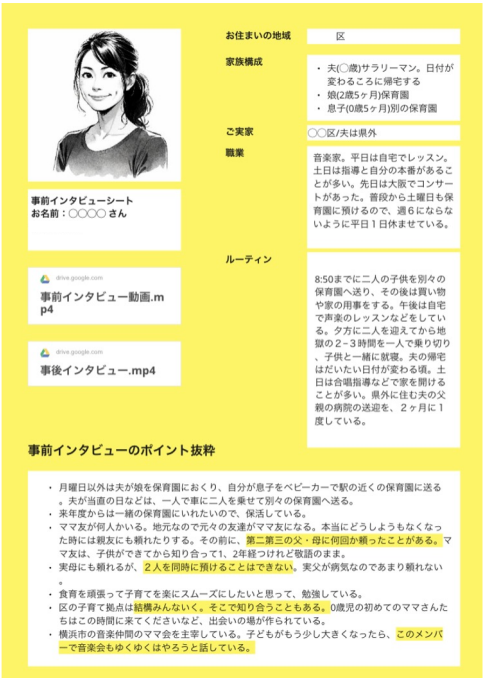
LINEの記述をもとに、参加者ごとの1日の流れを活動場所や移動を含めて可視化した。これにより、**限られた時間をやりくりしながら、自宅と自宅外の空間をなるべく効率よく移動し、仕事もこなす育児者の日々の様子**が浮かび上がってきた。参加者の一人であるAさんの場合（右図）、育児者本人の予定に子どもの予定も重なって、習い事への送迎が夕方の忙しい時間帯に発生し、複雑な動きをしていることがわかる。

このように育児者の1日の流れを可視化することにより、子どもが小さいうちは、子どものほぼすべての空間移動に親が同伴し、親の時間を費やしている実態が明らかになり、**育児に係る時間貧困問題が「空間」や「移動」などの他の要素と複雑に絡み合っている**実態が見えてきた。

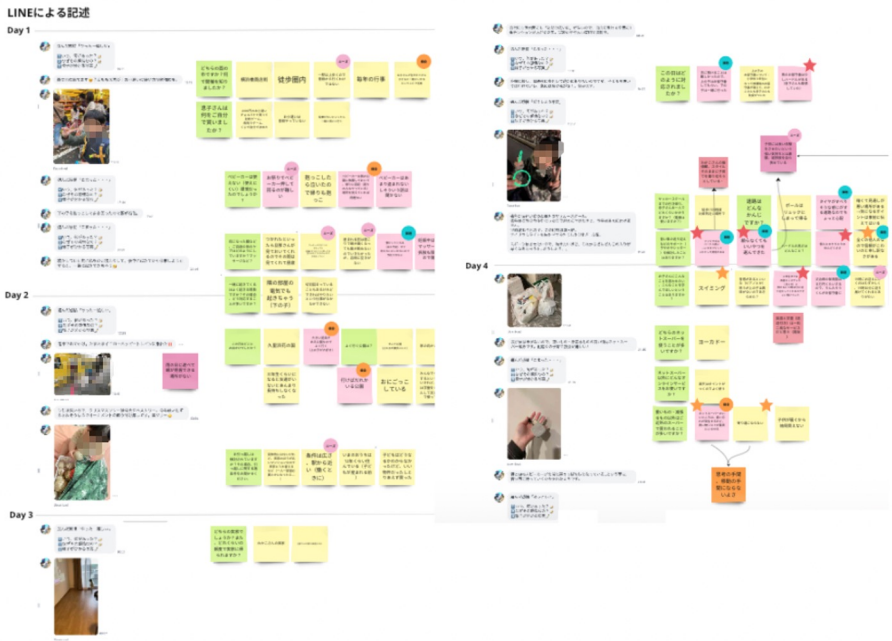


事後インタビュー

事前インタビューをもとに家族構成や職業、ルーティーンなどをまとめた対象者シートを作成した。また、LINEによる記述に対して質問やコメントを書き込み、事後インタビューで理解を深めた。



対象者シートの例



事後インタビューシート（一部）

2.3　オートエスノグラフィ｜参加者一覧

※画像はDALL·Eを使って個人が特定できないように生成しています。

Aさん
30代後半　小学生と未就学児（2歳）

育児の分担状況
夫は月の半分出張であまり家におらず、その間はワンオペ。実家は遠方で日常的には頼れない。

働き方　経営者
在宅＋オンライン（ファミレスも活用）
土日にイベントが入ることが多い

2児を育てながらコミュニティを拡大する
区が企画・運営する「友達つくろう会」に参加したことをきっかけに志の同じ仲間をみつけて、会社を立ち上げた。夜のネットワーキングの機会で夫の都合がつかない時は、子どもをママ友に預けて参加する。その際、お泊まり会に仕立てて、子どもたちがより楽しめるように工夫したりもする。

Bさん
40代前半　未就学児（2歳, 0歳）

育児の分担状況
夫は毎日日付が変わる頃に帰宅するため、特に平日はワンオペになることが多い。実家は市内で時々頼る。

働き方　自営業（アーティスト）
在宅でレッスン
土日に指導等で遠出することもある

横浜の地縁を活かして育児に取り組む
実家が横浜であるため、実母や自分を育ててくれた知り合いたちにサポートを頼ることもある。ママ友コミュニティは、同じ保育園を利用するお母さんたちや同じマンションに住むお母さんなど、さまざまな場で小さくつくる。横浜市の横浜子育てサポートシステムは活用した経験あり。

Cさん
30代前半　未就学児（1歳）

育児の分担状況
夫婦揃って在宅が多いため、二人で分担している。実家は遠方で日常的には頼れない。

働き方　自営業＋会社員
在宅＋週1市内出勤
時々遠方への出張がある

日々の「生活」を楽しくする場を考える
同業の夫と協力しながら子育てする。いわゆるママ友はいないが、運営するコミュニティスペースに来る人達が子どもをみてくれることもある。買い物は概ね自宅から徒歩圏内の商店街で済ませている。いわゆる「子育て」の冠がつく場所は自分が苦手なので、新しいコミュニティの作り方を模索している。

2.3　オートエスノグラフィ｜参加者一覧

※画像はDALL·Eを使って個人が特定できないように生成しています。

Dさん
30代後半　未就学児（1歳）＋妊娠中

育児の分担状況
夫は時間の融通は効くが出張も多い。朝の保育園送迎は夫が担当する。実家の近所に居住し、日常的に頼っている。

働き方　会社員
妊婦のため週2在宅勤務
都内まで片道1時間かけて通勤

実家の助けを得ながら育児をする
現在、実家が所有するアパートに住んでおり、預け先として姉家族を頼りにしている。両親に保育園の送迎を頼むこともある。最近、実家の近くに中古物件を購入。コミュニティスペース運営のスキルを活かして、ゆくゆくは自宅を改修し、地域に開きたいと考えている。

Eさん
30代後半　未就学児（1歳）＋妻が妊娠中

育児の分担状況
妊婦の妻は会社員で、主たる育児は妻が担う。朝の送りは担当している。妻の実家の近所に居住し、日常的に頼る。

働き方　教育関係者
朝の融通が効くため保育園送迎担当
土日にイベントごとが多い

義家族や近所と親密に付き合う
近所のコミュニティスペースのLINEグループに入っており、商店会のお手伝いをすることもある。第二子誕生後には育休を取ろうかと考えている。都市設計の知見があるため、子どもが生まれてから街の中に潜む危険性に敏感になり、つねに改善策について思いを巡らしている。

Fさん
30代前半　未就学児（4歳, 1歳）

育児の分担状況
都内に通勤する会社員の夫と分担している。料理は主に夫が担う。実家は遠方で日常的には頼れない

働き方　会社員
新幹線で片道1時間の通勤
週2回在宅勤務

夫や姉妹と育児を分かち合う
在宅勤務の合間には、ネイルなど上手に息抜きをしている。自身の兄弟家族と仲が良く、頻繁に行き来し、ともに時間を過ごすのが好き。第一子の出産後、産後クライシスになりかけたが夫婦でバーに行き、解消したことから、託児所付バーをやりたいと密かに考えている。

2.3　オートエスノグラフィ｜参加者一覧

※画像はDALL·Eを使って個人が特定できないように生成しています。

Gさん
30代後半　小学生と未就学児（1歳）

育児の分担状況
会社員の夫は普段22時過ぎに帰宅。朝の保育園の送りは夫が担当。市内に実家があるがあまり頼っていない。

働き方　会社員
時短勤務＋月8回在宅勤務
都内まで片道1時間半かけて通勤

時短と在宅を併用してキャリアを追求
お迎えのために時短勤務なので、仕事を途中で切り上げなければならないことがストレス。長男は英語学童に通わせていたが、下の子の保育料と同等（約月8万）かかるのでやめた。誰かに預けるなどはあまりしない。子どもたちには、いろんな経験をしてほしいと強く望んでいる。

Hさん
30代後半　未就学児（6歳, 4歳, 1歳）＋妊娠中

育児の分担状況
会社員の夫は普段22時過ぎに帰宅するため、平日はワンオペ。県内に実家があるがあまり頼っていない。

働き方　専業主婦
家事をこなしながらイラストを独学
絵本作家を目指している

子育て中にみつけた夢の実現を目指す
実家と義実家はともに自宅から1時間以内だが、あまり頼っていない。平日夫は多忙だが、土日は完全休みのため、子どもの面倒を見てくれる。一人で3人を2つの保育園に迎えに行くのが大変。妊婦であるため、坂と階段の多い横浜の地形でなおさら移動に困難を感じている。

Iさん
40代前半　高校生と中学生と小学生

育児の分担状況
会社員の夫は多忙だが、休日は子どもとの公園のお出かけに同行する。実家は遠方で日常的には頼れない。

働き方　主婦＋パート＋ボランティア
調理員補助として、週3日小学校で勤務
地域のコミュニティサロンのお弁当販売

子の障害をきっかけに地域で活動する
東日本大震災後に横浜に移住。三男が発達障害を抱えており、保健師の訪問検診の際に相談できるのがとても助かった。今は、障害を持つ子が通う療育センターのきょうだい児を預かるサービスでボランティアとして従事。特別支援学級に入る予定の親に向けてのお話会なども企画している。

2.3　オートエスノグラフィ｜参加者一覧

※画像はDALL·Eを使って個人が特定できないように生成しています。

Jさん

30代後半　小学生と未就学児（4歳）

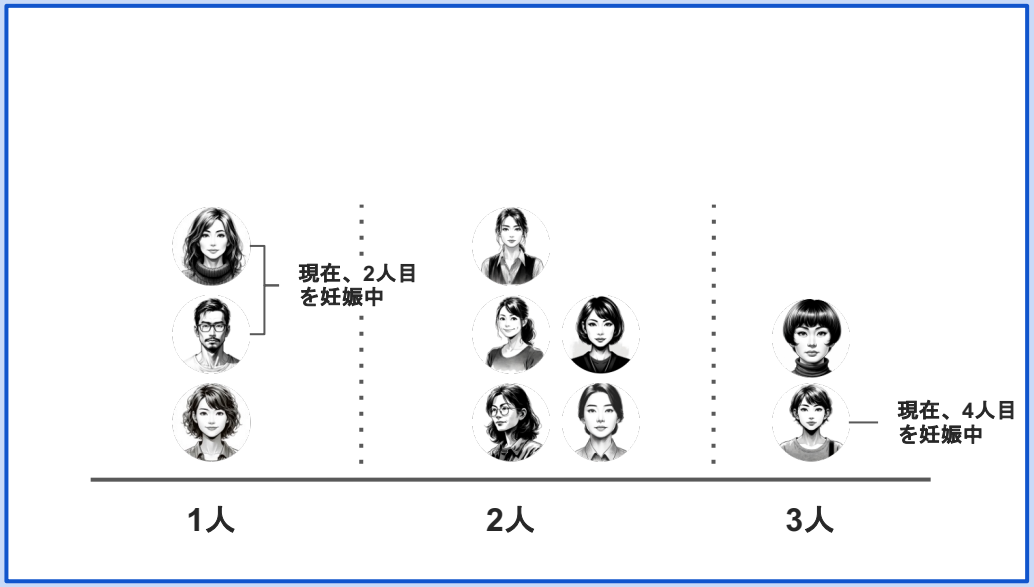
育児の分担状況
自営業の夫は毎日深夜に帰宅するため、基本ワンオペで家事育児をこなす。市内に実家があり、頼ることもある

働き方　自営業＋パート
週1回パート勤務
SNS等メディア発信

フットワーク軽く、人を繋ぐのが好き
子どもが寝ている4時30分に起きて家事をすませると、気持ちよく1日が始められ、自分に自信が持てる。区の「友達つくろう会」に参加したことをきっかけにママ友のコミュニティづくりに励む。世話好きで、海外からのホームステイも定期的に受け入れている。

参加者の年齢分布

子どもの数による分布



3. 子育ての社会背景と課題

3.1　日本における子育ての社会背景　p. 18

3.2　子育て政策の変遷　p. 19

3.3　横浜市民の日常から見えてきた子育ての課題領域　p. 21

3.1　日本における子育ての社会背景

「安定的な雇用・家族」を基盤とした制度が変わらないため、家族に子育ての負担が集中している

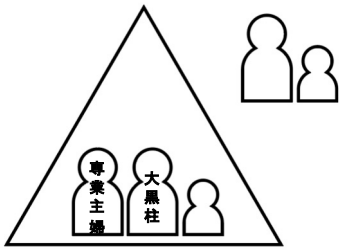
戦後～高度成長期の日本の家族形態は、**1.女性の主婦化　2.再生産平等主義**（適齢期に結婚、子が2、3人）**3.人口学的移行期世代**（子供や老人の世話を家族・親族で担いきれる、高度成長期の人口ボーナス）という条件のもとに構成されていた。それに合わせて、雇用システム・税制・年金制度など含めた社会制度が作られてきた。この家族形態は**21世紀の今や少数派**にもかかわらず、子育ても税制等も現在までこれを前提とし続け、家族がその負荷の受け皿になってきた。　参考｜11

高度経済成長期

女性の主婦化

再生産平等主義

人口学的移行期世代



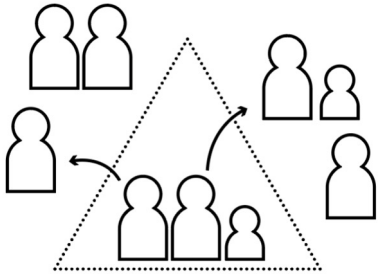
安定的な雇用や家族

現在

女性の活躍推進

晩婚化・晚産・
「産まない/産めない」

少子高齢化社会



従来型の雇用や家族が不安定に

終身雇用のもと1人の稼ぎで家族を養える層が大多数。子育て政策は母子家庭、失業家庭など養育が不足する家庭に対する福祉的な観点が強い。

かつて大多数を占めた**「安定」層が減少し、男女ともに不安定な雇用状況で家計を支える。専業主婦が担ってきた家事・育児もこなすため負担が家庭、特に母親に集中する**が、制度と実態がズレたまま「一億総活躍社会」「女性の活躍促進」など、外でさらに稼ぐよう求められ、負担は増える。

現在、子育てはかつてなく孤独になっている

1. 家族のあり方の変化
2. 労働形態・社会構造の変化
3. 地域社会の希薄化*

ほかにもさまざまな要因が
複層的に絡み合い…

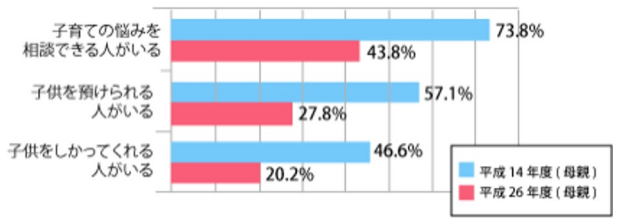
社会における子育て家庭の孤立

社内起業家
大原 徳子 氏

つらさを誰とも分かち合えない孤独が育児不安の最大の原因です。

専門家の大原氏は育児をする際に、その大変さを誰とも共有できないとつらくなるという。

***地域の中での子どもを通じた付き合いは減少している**



出所｜12

3.2　子育て政策の変遷

2000年～

1.57ショック・福祉の見直しへ

日本政府が少子化対策に乗り出したのは、**1990（平成2）年に合計特殊出生率1.57となった「1.57ショック」を契機**にしている。1.57ショック」を受けて、1994（平成6）年に「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）」が策定された。また、少子高齢化時代に需要が見込まれる社会福祉基礎構造改革としては以下の３点に重点が置かれた。

1. 個人の自立を基本とし、その選択を尊重した制度の確立
2. 質の高い福祉サービスの拡充
3. 地域での生活を総合的に支援するための地域福祉の充実

2005年～

人口政策としての子育て支援へ

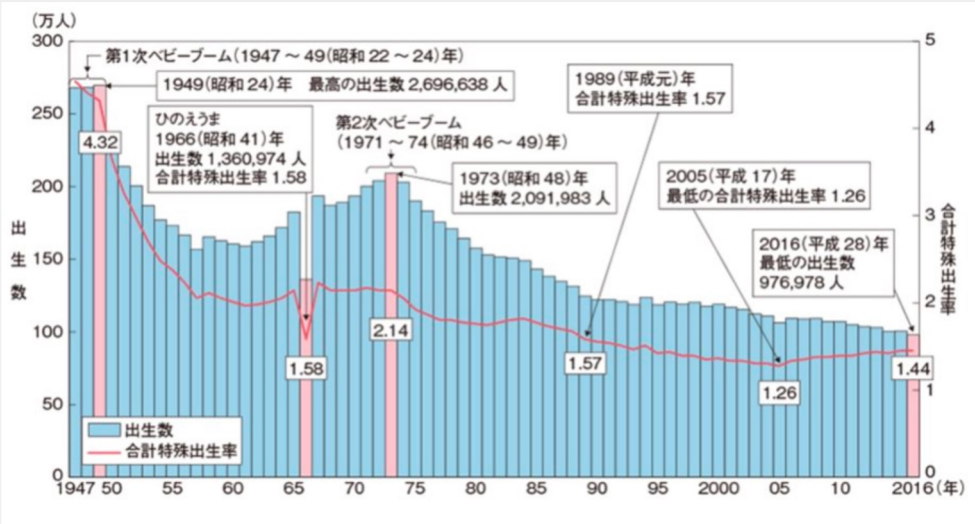
少子高齢化対策に取り組んだものの、少子化に歯止めがかからず、**次世代を担う子どもを育成する家庭を社会全体で支援する目的**で、2003（平成15）年に「次世代育成支援対策推進法」が制定され、全ての地方自治体と101人以上の労働者を雇用する事業主は、次世代育成支援についての行動計画を策定することが定められた。

2022年～

こども基本法の制定

日本は、**これまで人口政策として子育て支援を考えて**きており、子ども自身の権利を守るこども基本法は批准したものの30年近くも国内法は整備されてこなかった。しかし、2022年6月にこども基本法が成立し、23年4月に施行された。これに基づき2023年4月にはこども家庭庁が発足した。上記のように、日本は少子高齢化に基づいた子育て支援を行ってきた。しかし、日本では効果が出ない一方で、フィンランドやフランス等の欧州諸国では成果を出してきた。これらの国では、**少子化対策としての子育て支援ではなく、子どもの権利を守るための政策**が制定されている。子どもを尊重する考えが社会に浸透し、子育てしやすいと考える人が多いからではないだろうか。法整備とともに社会の変革が求められている。　参考｜13

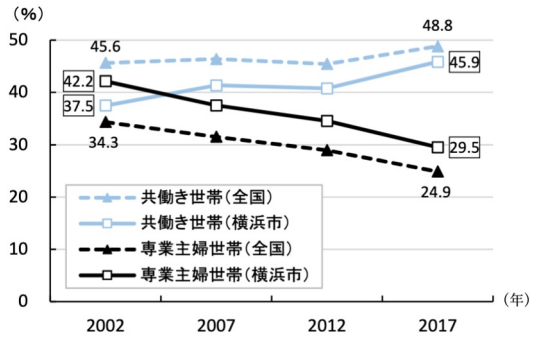
日本の人口動態の変化



出所｜14

共働き世帯の増加

上の図の日本の人口動態の変化にもみられるように人口の減少に伴い就業者数は減少してきたが、近年これまで専業主婦として就職していなかった女性が就労するようになり、女性の就業率は上昇した。これは、横浜市でもみられ、従来の子育て環境、家族構造から変化しているといえる。　出所｜15



子どもの権利がようやく明文化

日本には、これまで子どもの権利を包括的に守る法律は存在せず、子どもに関する政策は教育基本法、児童福祉法など要素別に縦割りされていた。基本法の中で言及されている「条約」とは、1989年に国連で採択された児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）。日本が批准したのは1994年、158か国目と遅かった。教育現場から**「子どもに権利を教えたら、学校が大変になる」**などの反対論が強くあったという。　参考｜16

3.2　子育て政策の変遷

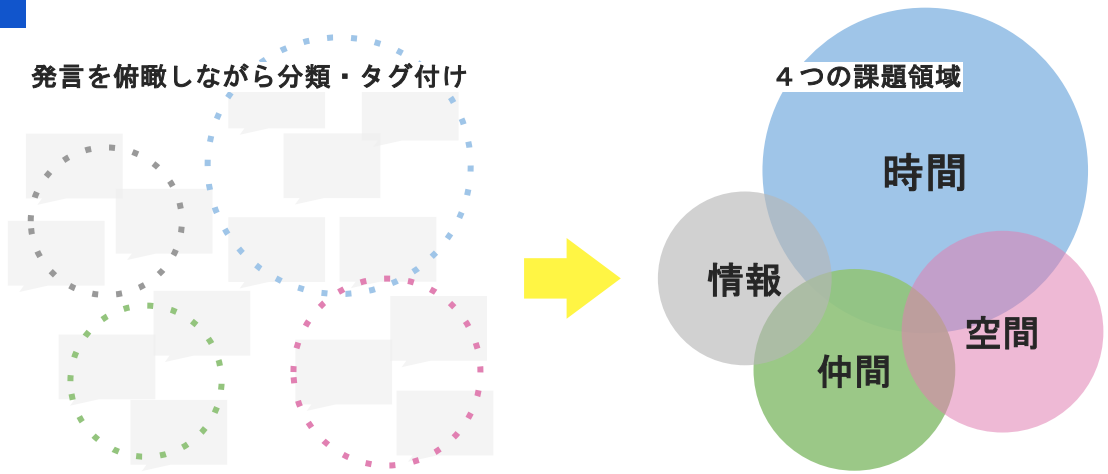
*この年表は、本資料の内容に関連する事項を中心に抽出・整理しており、国や横浜市の子育て政策の変遷をまんべんなく反映するものではありません。

	1940年～	2000年～	2005年～	2008年～	2022年～
社会動向	**第二次世界大戦後の戦争孤児への対応** 第二次世界大戦後、親や家族、家を失い**食糧がないという児童への対応**が急務だった	**福祉の需要拡大により児童福祉が大幅見直しに** 今後増大・多様化が見込まれる国民の福祉需要に対応するため、**福祉の見直し**を行った	**出生率の低下を受けて人口政策としての子育て支援へ** 過去最低の合計特殊出生率1.26（2005）を契機に**人口政策としての子育て支援の政策が拡充**	**ニートやひきこもりが問題に、待機児童解消は加速** **ニートやひきこもり**など、子ども・若者の抱える問題の深刻化 **待機児童解消に向けた取組が加速**	**子どもを権利の主体として位置付けるように** 児童福祉ではなく**子どもを権利の主体として位置付け**その権利を保障する総合的な法律の制定
国の子育て政策	**児童福祉法** など	**・子どもの権利条約批准** **・社会福祉基礎構造改革** など	**・次世代育成支援推進法** **・少子高齢化対策大綱** など	**・子ども若者育成支援推進法** **・子ども・子育て支援法** など	**こども基本法** など
横浜市の子育て政策	民生局の一部として児童福祉の保障をする取り組みを実施	**地域ケアプラザの設置** **横浜保育室の設置（1997年～）** **子育てサポートシステムモデル実施** **こどもログハウスの設置（1993年～）**	**子育て支援事業本部を設置** **かがやけ横浜こども青少年プラン** **地域子育て支援拠点を設置（2006年～）** **こども青少年局の設置（2006年～）**	横浜市で待機児童数が問題になり、保育所整備を加速 **保育所待機児童ゼロ政策**	**横浜市中期計画基本戦略** **小児医療費無償化（2023年～）** 家庭への直接支援に加え、コミュニティ・生活環境づくりにも着手
市民の動きや気になるトピックス	「働く母の会」が発足し、共同保育所づくりの運動が全国ではじまる（1954年～）	地域子育て支援という民間主体の活動が横浜市で生まれはじめる		待機児童数が1,552人（2010年時点）と、横浜市が全国ワースト1位の自治体だった	

3.3　横浜市民の日常から見えてきた子育ての課題領域

子育ての最も大きな課題は時間：そのほかにも３つの課題領域が存在

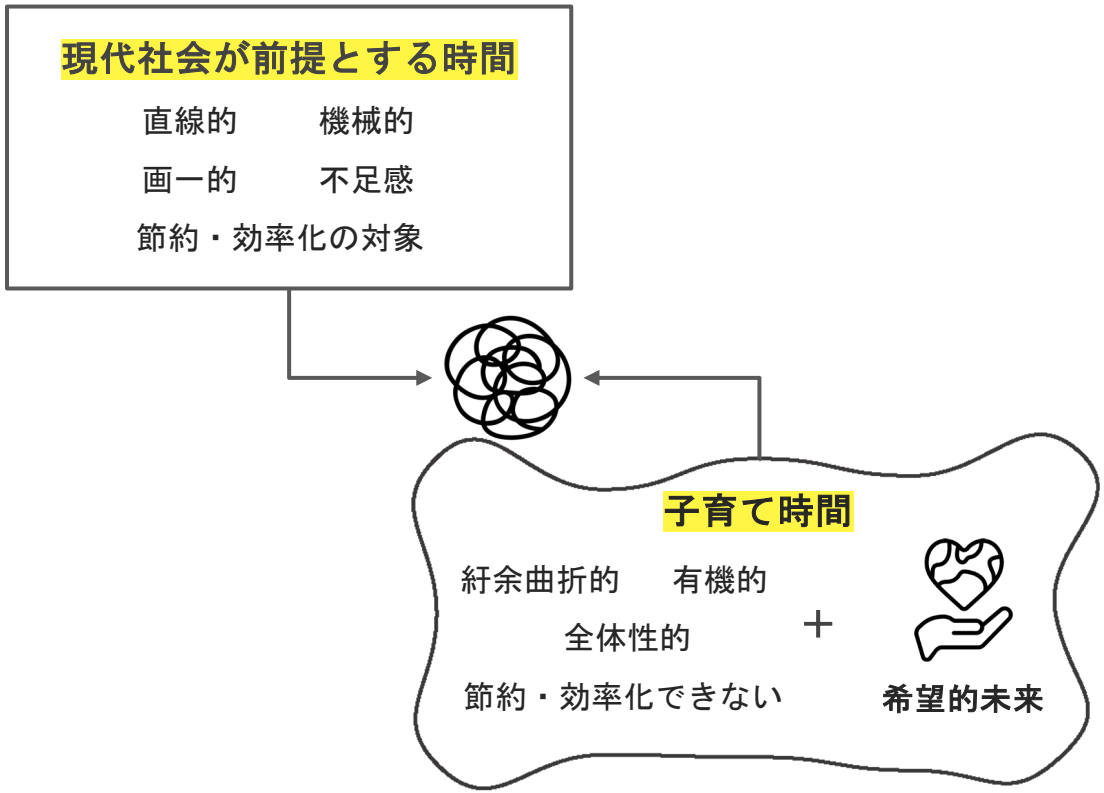
オートエスノグラフィーでは、調査プロセスの中で参加者がインタビュー中に発した言葉やLINEにアップしたコメントのうち、横浜市のプロジェクトメンバーを含む調査者らが重要だと認識した発言を分析の対象とし、全発言を俯瞰しながら分類・タグ付けを行った。その結果、**分析の対象となった発言160個のうち、約70%が「時間」に関連**していた。また、「時間」のほかにも**「空間」「仲間」「情報」という３つの課題領域が存在**することが明らかになった。



現代社会が前提とする時間とは異なる子育ての時間

現代社会が前提とする時間は、産業革命や時計の正確性の向上と小型化をきっかけに、貨幣と対等の価値をもつようになった時間である。**「直線的」「機械的」「断片的」といった特徴を持ち、かつ常に「不足感」がつきまとうがゆえに失うことに対する不安を生じさせ、極限まで節約・効率化する対象**となる。例えば、「母親の時間貧困」の実態を明らかにしたハマスタディもこの近代的な時間を前提にしている。

子どもを家庭に迎えることによって、生活の予測不可能性は一気に高まり、直近の予定を立てることもままならなくなる。つまり、前述の画一的な現代社会の時間とは異なり、**子育て時間は紆余曲折的で有機的、同じ瞬間はまたとなく、効率化という考え方自体が当てはまりづらい**。加えて、今回の調査を通して、子育て時間が**子どもを起点に今後の生活や地域をよりよくしたいと思わせる希望的未来の側面を併せ持つ**こともわかった。



参考｜17,18

3.3　横浜市民の日常から見えてきた子育ての課題領域

子育て時間の２つの側面

前頁の通り、子育てには現代社会が前提とする直線的で効率化できる時間とは異なる、紆余曲折的で効率化できない時間が存在することが調査を通して明らかになった。同時に、子育て時間には、子どもや次の世代のために、日々の生活や地域を良くしたいという思いを喚起する未来的な側面が存在することもわかった。

A. Uncontrollable Now: ままならない今

親の時間と子どもの時間が重なり絡まり合うことで
予測不可能性と複雑性が高まる日々の生活

育児者は子育て以外にもたくさんのタスクを抱えて生活をしているが、子どもはそんなことはお構いなしに自分の都合、つまり、育児者とは異なる時間を生きている。育児者と子どもの二つの異なる時間が重なることによって、**少し先の予定は立てにくくなり、タスクごとの難易度も上がる。**現代社会の画一的な時間の中で、**子どもから寄せられる圧倒的かつ（親から見れば）不連続な要求に応えるという「ままならなさ」**が子育てにはつきまとう。

Bさん

駄々をこねて地べたに１時間…夕食の準備どうしよう

Fさん

子どもとスーパーに行くと、子どもが色々なものに気を取られて時間が２倍かかります....

Eさん

子どもがいることで、時間に遅れたり、楽しみにしていた予定に参加できなくなったことがありました。それ以来、子どもの体調や機嫌によって変更がきくように、予定を詰め込まないようにしています。

B. Hopeful Futures: もたらしたい未来

子どもの豊かで幸せな暮らしに思いを馳せることで
延伸・拡張し、自らその実現に寄与したいと思わせる未来

子どもは多くの場合、親が体験するよりも先の未来の中を生きることになる。そんな子どもの先の未来に触れることによって、親は直接体験することのない世界（＝未来）も自分事化し、**この世界が次世代にとってよりよいものになるための行動を起こしたいという思いが高まる。**この希望とも呼べる感覚が現在にフィードバックされ、実際の行動につながることで自己効力感や幸福感、ウェルビーイングといった価値の創出につながる。

Dさん

もともと仕事でまちづくりに携わっていましたが、自分の子どもが大きくなっていく環境をもっと良くしたい、この地域を良くしたい気持ちが強くなりました。自宅の一部開放を検討しています。

Fさん

産後クライシスに陥った際に、夫とバーに行ったことがきっかけで産後クライシスを克服しました。その他の人のためにも託児バーをやってみたいと思っています。

Cさん

子どもができてから、行政に相談する前の、小さい困りごとを話せるような場をつくりたいと思うようになりました。

4. 調査から得られたインサイト

4.1　インサイトの導出プロセスと一覧　p. 24

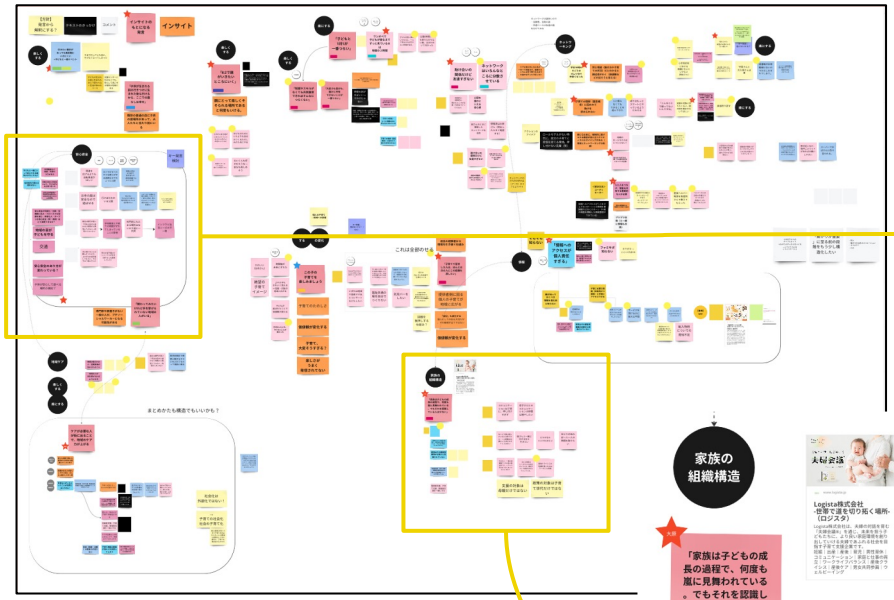
4.2　インサイト　p. 26

4.3　インサイト分析　p. 35

4.1　インサイトの導出プロセスと一覧

インサイトの導出プロセス

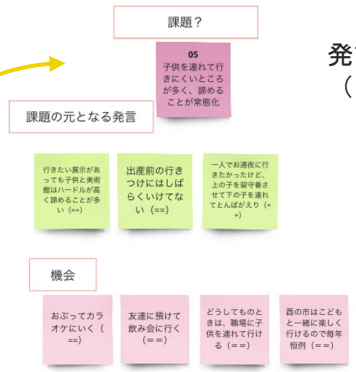
オートエスノグラフィーでのLINEによる記述と事後インタビューを実施後、分析の対象となる発言を選定し、俯瞰しながら分類した。この際に、時間、空間、仲間、情報の４つの領域に課題が集中していることが明らかになった。また、発言を分析する中で、育児者たちが感じる日常の障壁や、こうあったらよいと思う未来についての発言をグルーピングし、実践中のアイデアや専門家の発言なども含めて、9つのインサイトを導き出した（pp. 26-34）。そのうえで、インサイト間の関連についても俯瞰して分析し、一覧にまとめた（次頁）。



ピックアップした発言

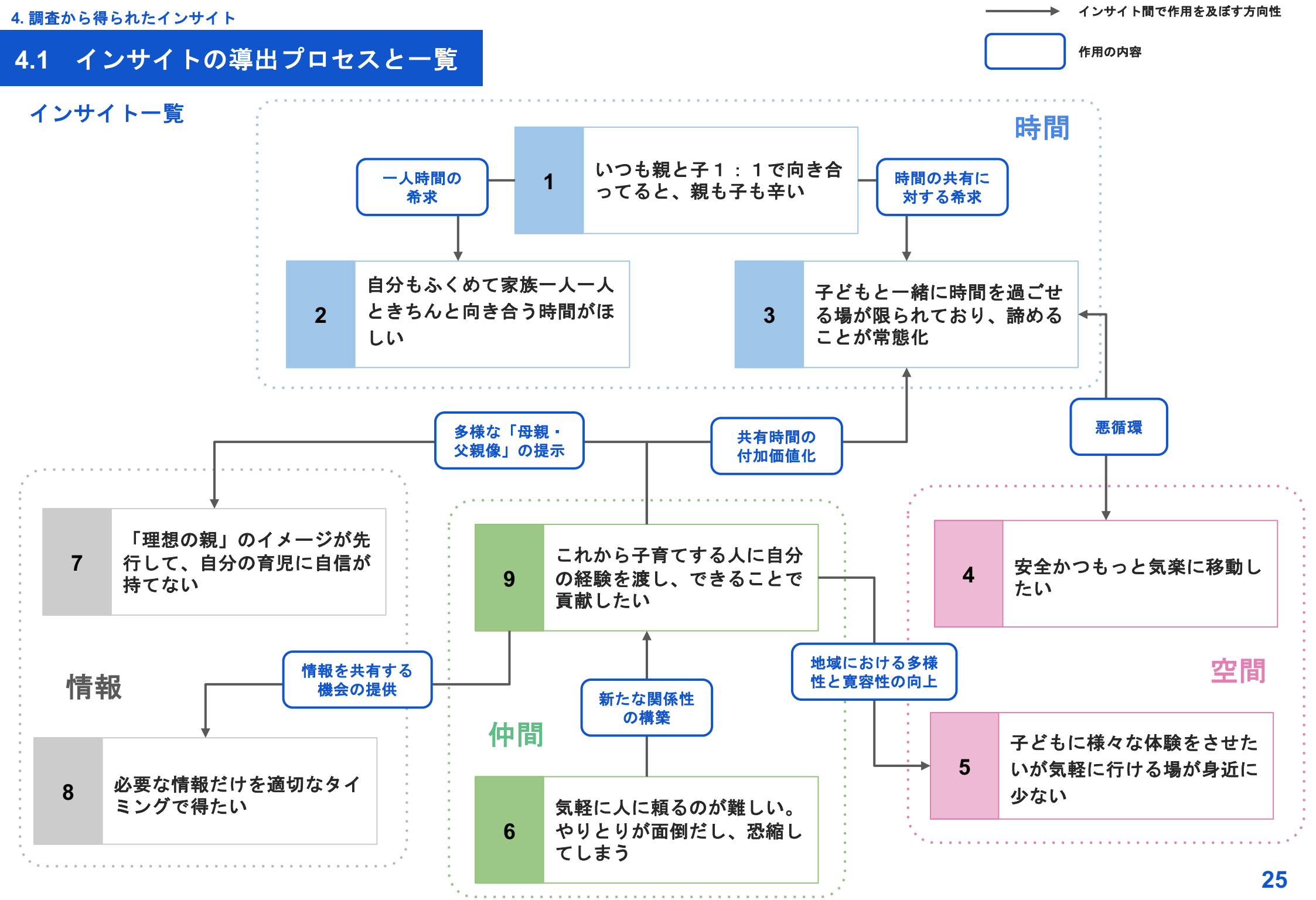
発言のグルーピング

発言のグルーピングとタグ付



発言から課題と機会（アイデア）に分ける

4.1　インサイトの導出プロセスと一覧



4.2　インサイト

インサイト
01

いつも親と子、１対１で向き合っているとつらい

子どもの世話をし、相手をしながら、家事や仕事のタスクもこなさなければ家庭が回らない。この状況を育児者**１人で引き受けるのは精神的な負荷が高い。**

POINT

1. 安全に子どもを見続けるのは責任が重い。
2. 子どものペースに長時間付き合うと飽きる。
3. 余裕のない育児者と時間を過ごす子どもも楽しくない。
4. 大変さや楽しさを誰とも共有できないのは孤独である。

オートエスノグラフィーでの声

Bさん

2人の子どもを保育園から迎えて寝かせるまで、一人で地獄の３時間を過ごします。下の子は、ちょっとかわいそうなんですけど、とりあえずミルクを与えて後回しになっちゃうんですよね。

Jさん

基本ワンオペ。毎晩、早く寝てくれーと念じています笑。夜中近くに夫が帰ってくると、大人と話せるのでハッピー！

Eさん

娘の機嫌が悪くて怒ってしまったことがあるのですが、その時のことをよく考えてみると、自分の機嫌が悪かったことが原因だったんですよね。

Cさん

①午後からは、打ち合わせもあり仕事しながら子守

②1人遊び時間が多くなり、コミュニケーションとってあげないとな～
でも打ち合わせあるしな～　な気持ち👀

14:13

子どもと一緒にいる時間をもっとつくりたいが、仕事との兼ね合いでコミュニケーションをたくさんとるのがむずかしい。その時間、子どもには一人遊びをさせるしかない。

アイディアや専門家の意見・事例

Aさん

夜友達の家に預けるときにお泊まり会に仕立てると、子どもは嬉しい。親も夜に預けることの罪悪感をあまり感じることなく、好きなことができる。うちが預かることももちろんあります。

Iさん

子育てを手伝ったりしたいと思うけど、一人で子どもを見るのは躊躇してしまうという近所の人が何人かいるんです。でも、たとえば三人で二人見るとか、四人で四人見るならできそうだし、楽しそうと言ってるんですよね。だから、何人かに横浜子育てサポートシステム提供会員の講習をうけてもらっています。

社内起業家
大原 徳子 氏

時間は延びるけど楽になるし、楽しくなる！
～共同養育の可能性について～

保育園の後、お友達親子に来てもらってみんなでご飯を食べ、お風呂に入れる「拡大家族」でワンオペ育児を乗り切りました。時間がかかって非効率ではあるのですが、一対一で向き合う時間がとにかく苦痛だったので、精神的に楽になり、子どもは毎日パーティのように楽しんでいました（笑）。

地域のみんなの家

大原さんは、自宅を開く共同養育を行っていたが、家に人を入れることに抵抗がある人もいるので、だれもが立ち寄りやすい近所のリビングのような「公共の家」があってもいいのではと提案する。

4.2　インサイト

インサイト
02

自分もふくめて家族一人ひとりと きちんと向き合う時間が欲しい

育児者の多くは何もしない休息時間が欲しいわけではない。子どもに邪魔されず**自分に集中できる時間や、家族の一人ひとりと向き合う時間**がほしい。

POINT

1. 子どもといると、自分のことは中断されてばかりになる。
2. 子どもの奔放さに、自身の理想のあり方を崩されてしまう。
3. 子どもが複数いると、一人ひとりの話に耳を傾けられない。

オートエスノグラフィーでの声

Cさん

子どもの熱が下がって1日以上たったので、登園の決断！子どもを預けて仕事に集中できることのありがたさ…今日も8時間集中して働くぞー！w

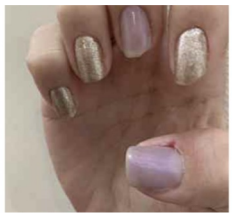
Iさん

授業参観の出来事。私ではないけれど、小さい子を連れたお母さんが多かったな～。大変そうだし、下の子も退屈になっちゃうし、上の子だって今日は私だけを見てほしい！って思わないかな？横浜子育てサポートシステムを個人だけじゃなく、団体(授業参観の時に、学校で空きスペースを用意して預かる)利用のような感じで、できないのかな？という疑問。

Fさん

❶火曜、在宅仕事の合間に、先日入手したセルフジェルネイルを塗ってみた
❷爪先が整っていると気持ちが高まって元気になれる。乾くのを待つ時間が取れなかったり、先が欠けてくるのをマメに塗り直しする余裕がなくてサボっていたけど、自宅ジェルネイルが安価に短時間でできると知り、実際にやってみると簡単で欠けにくくて長持ちなので嬉しくなった
❸ネイルの写真💅

12:09



在宅勤務中にできるセルフジェルネイルを導入したことで、自分自身の気持ちが高まるネイル時間がとれた。

アイディアや専門家の意見・事例

Hさん

子どもが産まれてからなかなか行けなくなってしまった美術館。夫がたまに美術館に連れて行ってくれるのがうれしい。

Hさん

土曜日は朝9時から、長女の習い事。ピアノを始めて２年目、平日はゆっくり練習する時間を取りにくいが、楽しく上達している。私としても、この習い事の時間が唯一長女との2人きりの時間になれるので楽しみ♪ レッスン場所は自転車で10分ほど。

インクルーシブ教育
古市 理代氏

お母さんという役割の緊張感

ダウン症をもつ息子が小学校に上がるまでの時期は、大変で自分のことはほとんどできませんでした。小学校になり「保護者」でない自分の時間を日中数時間取ることができた時は、ものすごい解放感でした。反動でゲーム漬けになったりも（笑）。でも、それくらい自分の時間は大事なんです。

認可保育所に気軽に預けられない理由

現状では、認可保育所は、親が「仕事」以外の時間は基本的に預けることができない制度になっている。また、土曜日に仕事があり預ける場合は、平日のどこかを１日休ませて週６日通園にならないように要請される場合が多い。

4.2　インサイト

インサイト
03

子どもと一緒に時間を過ごせる場が限られており、諦めることが常態化

子どもにとっても**親にとっても**魅力的で気張らずに楽しめる場所、および時間の過ごし方が限られている。

POINT

1. 子どもが騒いで他人や店に迷惑をかけるのが心配。
2. 子連れの外出にはさまざまな事前準備が必要である。
3. 子連れが想定されていない、あるいは歓迎されていない場所が多い。

オートエスノグラフィーでの声

Bさん

出産前に行きつけだったお店には、しばらくいけてないです。子ども連れの外食はハードルが高いです。

Gさん

訃報に接し、一人でお通夜に行って静かに祈りたかったのですが、急だったので夫に預けるのも難しかった。なので上の子を一人で留守番させて、下の子だけを連れてとんぼがえりしました。上の子も夜のお留守番については少し緊張していました。

Dさん

行きたい展示があっても、子どもと美術館はハードルが高く諦めることが多いですね。

Bさん

2️⃣久しぶりに感じるアルコール臭の強い休みの日の夜の電車😭
世の中皆さん楽しんでいるんだねぇ。いいねぇ。。
リハーサル・本番、横浜での仕事なので近いのはありがたいし、夜景に癒されました⭐

21:06

卒乳したら、仕事関係の打ち上げにいきたいと話す。
子どもがいると、外食を避けてしまう傾向にあり、以前の行きつけにはいけていないそう。

アイディアや専門家の意見・事例

Aさん

夫の調整がつかないときは、友達に子どもを預けて、飲み会にだって行きます！

Gさん

酉の市は子どもと一緒に楽しく行けるので毎年恒例で参加しています。子どもも喜ぶし、お小遣いの勉強にもなってます。

Fさん

妹に誘われ、復職以来久々のカラオケへ。上の子は家で夫が見てくれてありがたい。下の子を連れて行ったが、抱っこしてもご飯をあげても機嫌が悪く、結局おんぶしながら歌った（笑）よい息抜きになった。

保育士企業家
小笠原 舞 氏

子どもが生まれる前の行きつけに生まれた後も行けるから、ここでの暮らしは幸せ

今住んでいる長田（兵庫県）は、子どもが生まれる前の行きつけに、産んだ後もいけることがとても幸せです。長田では、長屋文化がまだ残っており、普段から子どもの預け合いが普通。預けられる人もたくさんいます。また個人店が多く、お店にも子どもがいて当たり前の雰囲気があります。

まあるカフェ　福井県福井市

専門家インタビューの協力者でもある西出氏が働く「まあるカフェ」は、医療ケア児向けの専門施設に併設されたカフェだ。ここは地域の人が普通に利用しており、スタッフが子どもをみてあげるなど、多くの方にとって利用しやすいカフェとなっている。 出所｜19

4.2　インサイト

インサイト
04

安全かつもっと気軽に移動したい

子どもの発達段階によって移動手段は変わり、ハードルもそれぞれ違う。子ども**の安全性配慮と周囲への心配りで育児者はまったく気を抜けない。**

POINT

1. 子どもが他人に迷惑をかけてしまうことが心配。
2. ひとりで複数の子どもを移動させるのは神経をつかう。
3. 階段が多くてベビーカーや自転車が通れずに迂回せざるをえないなど、坂の街・横浜ならではの事情もある。

オートエスノグラフィーでの声

Jさん

2人連れて地下鉄は楽になったようでまだまだ気を使います。自分がほかの赤ちゃんに対して「うるさいな」と思うことは全くないけれど、自分の子の場合は「うるさいと思うよね」と周りに対して思ってしまう。次女が騒ぎ出したときのために、お菓子やおもちゃはいつも持っています。

Bさん

子どもの保育園が違うので、一人で迎えに行くのが大変。さらに、上の子がいやいや期で道路に寝転がることも。一人抱っこしてるので起こすことができず、気持ちが切り替わるのを待つしかないです。

Eさん

朝の綱島街道は、通勤通学や登園の人、自転車、車でいつも混み合います。なかには車道を逆走する子供を乗せた自転車も。でも、子供がいると朝の一分一秒が惜しいのも、よく分かります。綱島街道は都市計画で拡幅が決まっていますが、その際には車道ではなく、歩道と自転車道に割り振ってほしいです。

歩行者道路がないと自転車や車と接触しそうでヒヤヒヤすることも

アイディアや専門家の意見・事例

Bさん

帰路で同じマンションの友達親子に会ったら、子どもたちが競争してはやく家に着くことができて、気分良いまま夜をこなせた気がする。偶然のママ友さんとお子さんとのの出会いに感謝。

Bさん

保育園の隣に公園があって、いつもそこに子どもが吸い寄せられてしまい、なかなかスムーズに帰宅できないんです。電動自転車なら、保育園で子どもを乗せてしまえば、あとはスムーズに帰れるみたいなので、購入を検討しています。

医療ソーシャルワーカー
西出 真悟 氏

ケアが必要な人がまちに出るとそのまちのケア力があがる

医療ケア児の移動は非常にハードルが高いです。ですが、ケアが必要な子がまちに出ることで、まちのケア力を高めることができるのです。例えば、呼吸器をつけた子どもたちと集団で新幹線の乗り換えを毎年繰り返していたら、最初はとまどっていた駅員さんのサポートが、どんどんスムーズに。

ボンネルフ型の道　オランダ

オランダでよくみられる、家の前の遊べる道路空間。車は通ることができない、もしくは子どもが通ること前提に運転をする道。子どもだけでなく近隣住民の交流にも使われている。　出所｜20

4.2　インサイト

インサイト
05

子どもに様々な体験をさせたいが気軽に行ける場が身近に少ない

子どもに多様な経験をさせようと思うと、親に金銭的な負担がかかり、遠くまで送迎する必要も出てくる。インサイト04にあるように移動のハードルも高い。

POINT

1. 近所に多様な経験をさせられる場や機会がない、もしくはあるけど知らない。
2. 体験自体がサービス化され、お金がかかる。
3. 親が送迎したり、付き添わなくてはならない（親の時間が縛られる）場合が多い。

オートエスノグラフィーでの声

Gさん

子どもにはいろんな視点を知って欲しかったので、小学校を休ませて、シアトルに住む姉のところに3週間行かせていました。

Jさん

日曜日に航空会社の格納庫でのダンスの発表会、無事終わり。オンラインでのレッスンだけであれだけうまくなるんだからすごい！練習に付き合ってたからこっちまで緊張したし無事に終わって抜け殻感まっくす、、仕事なくてよかった。成田空港遠い、、これもし飛行機好きじゃなかったら行かないレベル

Iさん

①公会堂の予約をしようと利用の手引きを見たら…
午前のみ、午後のみの利用がない‼
②場に慣れるための見学体験会を予定していたので、1日借りるとお金がかかってしまう…半日の料金も作って欲しいー

イベントで公会堂を使いたかったが、多目的室が１日単位でしか借りられないことに気付き、困ってしまったという投稿。予算がなくて、これから企業など、いろいろなところの助成金を申請する身なので、そこまで今投資ができない状況だという。

アイディアや専門家の意見・事例

Aさん

地域のイベントを主宰していて、そこに子どもを連れて行くと、子どもが売り子をやるようになったんです。楽しんで成長している様子が嬉しかったです。

Eさん

近所のお寺の庭は広くて緑もあって安全なので、たまに子どもを遊ばせます。近所の子たちがもっと頻繁に遊びに来てもよいのではないかなと思っています。

医療ソーシャルワーカー
西出 真悟 氏

「ミュージシャン募集（看護師歓迎）」と求人

スタッフは、いろんな特技をもった人が多いです。僕たちは、子どもたちに、いろんな人に触れてもらうことが大切だと考えています。だから、スタッフ募集の時に、例えば「看護師募集（楽器など特技があれば望ましい）」ではなく、「ミュージシャン募集（看護師歓迎）」という形で募集します。専門性よりも空間やコミュニティに与えられるインパクトを大切にしています。

はっぴーの家ろっけん　神戸市長田区

専門家インタビューの協力者である小笠原さんが暮らす長田にある介護付きシェアハウス「はっぴーの家」は子育て世代、若者、海外の人など多世代が集まる場所だ。子どもたちをかわいがってくれたお年寄りが亡くなる機会も少なくなく、小笠原さんは「人の死も当たり前の日常にある場所」という。 出所｜21

4.2　インサイト

インサイト
06

気軽に人に頼るのが難しい

子育ては家族、あるいは母親が主に担うものだと思っている人が多く、人に頼るのが難しい人が多い。しかし、共働きの核家族では家族で担うには限界がある。

POINT

1. 自分のやり方で子育てをしたい気持ちが大きい。
2. 子どもを任せられるほど信頼できる人が周囲にみつけられていない。
3. どんなことで何に頼っていいのか、判断ができない。
4. なにかを頼むことが申し訳なく感じ、相手の負担を考えてしまう

オートエスノグラフィーでの声

Gさん

知らない人・場所には預けられない。誰かに頼むなら、相手にもメリットがあると頼りやすいですかね。でも、これまで自分でやってきたので今更感があるし、自分でできると思っています。

Hさん

他人を家に入れることに抵抗があるんですよね。でも今度４人目が生まれる時にはさすがに無理そうなので、腹をくくって、横浜子育てサポートシステムの利用も検討しています。

Hさん

友人に、ランチに誘われた。保険の勧誘と分かっていたので、やんわりと断ったが、あまりの押しの強さに断りきれず、仕事の合間に時間を作った。
気が重かったが、思わぬ収穫があった！
１児のママである友人は、横浜市の産前産後ヘルパーを利用したことがあるそうだ。
〇食事の準備
〇掃除洗濯
〇赤ちゃんのお世話
２時間の利用で、多くの事を手伝ってもらい、とても助かったという体験を聞かせてくれた。
私はもともと、他人を自分の家に入れることに抵抗があるので利用したことが無かったが、次の産後にはお世話になりたいな、という気持ちになった。
身近な人の体験談は、とても大切だなと思い、友人に感謝。

アイディアや専門家の意見・事例

Bさん

1️⃣ママ友さんが風邪でダウンしているそうで、彼女の住むマンションの近くにちょうどいたので、色々と差し入れを。そうしたらご主人のお土産の生ハムをいただく。さらにその後、別のママ友さん(お子さんが上の子男の子2歳、下の子女の子0歳)に、うちの長女が着られなくなった物をお渡しに。そうしたらお返しにサイズアウトした男の子服をいただいちゃった☺️
2️⃣ママ友さんやその子どもたちに会えて嬉しい🎊それに思いがけずお返しをいただいちゃって嬉しい😆
22:19

こだわり派のママ友にはモノではなく、病気の時のサポートでコミュニケーション。

社内起業家
大原 徳子 氏

自分が「支援の対象である」という踏み絵を踏みたくない

「〇〇相談」などと銘打たれた施設などには、私自身もそうでしたが、非常に行きにくいものです。「相談に行く＝支援の対象である」という踏み絵のような気がして「育児に関する助けを求める＝子どもに対する愛情が足りない」という図式に陥るのが怖かった。育児のつらさと愛情は別物なのに。

産後の女性の８割がうつ、またはその予備軍

新生児を抱えた女性が、眠れない、体がだるいといった症状をいっても、甘えていると受け止められることも少なくない。「お母さんなんだからしっかりして」「がんばって」という言葉が助けを求めづらくしている。８割の女性が産後うつまたは予備軍にもかかわらず、実際に受診して診断を受けるのは５％以下。グレーゾーンへの支援を手厚くするべきだと大原氏は話す。　参考｜22

4.2　インサイト

インサイト
07

「理想の親」のイメージが先行して、自分の育児に自信が持てない

「よい親でありたい」「正しい子育てをしたい」という理想と、そうできない自分のギャップに苦しむ親が一定数いる。

POINT

1. 自分の育児を肯定してもらえる機会がなくて不安。
2. 良い部分だけが切り取られるメディアに影響されている。
3. 今の時代および自分に合った育児がわからない。

オートエスノグラフィーでの声

Jさん

YouTubeの素敵なファミリー像が基準になって、自分の育児に自信が持てません。点数をつけるなら10点くらい。

Fさん

自分の母親がスーパーウーマンでした。土曜日も働いている薬剤師で、昼休みに家に帰って家事をやる感じ。自分にはそれはできないと思った。

Cさん

①週末恒例、子どものごはん作り置きタイム。

②離乳食は完了期。週末大変だな〜と思いながら作っていた離乳食作り置きもあと少しかなーと思うとなんかさみしくもあり。
料理なんてたいしてしてこなかった自分によくやったと伝えたい😂

14:06

14:07

これまでの人生で料理はたいしてしてこなかったが、子どもの食事に関しては「手作りがいいんだろうな〜」という漠然としたイメージがあったそう。毎週末に、３時間ほどかけて離乳食のストックを準備しているという。

アイディアや専門家の意見・事例

Hさん

一人目のときはすごく一生懸命育児をしていて、公園にも毎日、数時間連れて行っていました。でもほかのママと知り合う中で、もっとツールに頼ってもいいんだとわかったんです。

Iさん

育児は学習ドリルだと思うことにしました。兄弟でもみんな違くて、親に課される課題も違う。学びや人との関わりの面で、特に障がいのある三男のときにすごく学びになりました。自分のところに来てくれてありがとうと思ってます。

保育士企業家
小笠原 舞 氏

完璧を求めるお母さんは大変

育児に完璧を求めたらきりがありません。自分のなかで理想があればあるほど、ちゃんとしなくてはと思ってしまい、育児がハードルになります。保育士をしていた頃から、真面目なお母さんほど苦しんでいるのを見てきました。**「完璧な大人も 子どもも いない！」**を第一に掲げてasobi基地を立ち上げ、運営する中で「もっと楽でいい」と繰り返し伝えてきました。

いい親という幻想

小笠原さんの共著『いい親よりも大切なこと』（新潮社）では、「○○しなければならない」という子育てのつらさは9割が思い込みと説き、子育てがつらいと感じる人に、子どもがのびのび育ち、親も楽になれる秘訣が提示される。　参考｜23

4.2　インサイト

インサイト
08

必要な情報だけを適切なタイミングで得たい

日々の生活で必要な情報も、子どもの健やかな成長のために必要な情報もあるが、忙しい日々の中では、効率よく、その時に要る情報にアクセスしたい。

POINT

1. 産後も育児中も、情報収集のためだけに割ける時間が少ない。
2. 何がわかっていないかもわからない状態から育児が始まる。
3. 情報が多すぎると、比較や判断の時間と労力がかかる。

オートエスノグラフィーでの声

Cさん

子育てサポートの制度を知りませんでした。URLを教えてもらっていいですか？（インタビューでの発言）

Bさん

1️⃣今日は保育園が週6にならないようにする為に子どもたちはお休みの日。
子ども2人を連れ夫を職場に送り、帰りに今日こそ区役所へ🚗
2️⃣来年4月入園(転園)の申込が11/6消印有効までなので取りに行けて良かった…

Bさん

↑
ついでに同じ区に住むママ友さんの分も。
去年は情報弱者だったから、締め切りを逃してしまったのでした😭
まぁそれほど必死ではなかったということでもあるけど。
横浜市からのLINEでそこら辺流してくれれば良いのに。

保育園の入園の申し込みはいまだに封筒申し込み。また、横浜市の公式LINEではそういった重要な締め切りに関してはお知らせされない。
昨年は締め切りを逃してしまったそう。

アイディアや専門家の意見・事例

Iさん

発達障害の末っ子は、髪を切られる感覚や音に敏感だったり、じっと長く座っているのも難しい。子どもが３歳くらいのときに検索して、子どもにあわせて「ゆったりコース」、「抱っこコース」などがあって、安心してカットしてもらえる床屋をみつけました。同じような特性を持つ子の親にこの床屋の情報を教えたら、継続して通ってくれているみたい。今では、床屋さん経由で、その友達の最近の様子を教えてもらえる感じになっていて、なんだか嬉しいです。

Iさん

特別支援級に入る予定の親に向けて、個別支援級やアレルギーのことも相談できるお話会をやっています。先生との面談はあるけれど、実際のところ、みんな生のお母さんの声が欲しいんですよね。

社会学者
工藤 遥 氏

日本では情報のアクセスが自己責任すぎます

日本では、**自分にとって必要な情報を、親がその都度、自ら探して取捨選択**しなければなりません。しかし、どんな情報がいつ必要か、何が正しいのか判断するのは困難で、時間や手間もかかります。フィンランドのネウボラでは、こどもの健診や親子との対話を通して、**専門家が、その子や親にとって必要な支援や適切な情報を判断して提供**してくれるところが、親の安心や利便性につながっていると考えます。

ネウボラ
フィンランド語で「アドバイスの場」を意味する「ネウボラ」。妊娠･出産から子育て期まで保健サービスと子育て支援サービスが一体となったワンストップによる切れ目のないサポート体制のこと。 出所｜24

4.2　インサイト

インサイト
09

これから子育てする人に自分の経験を渡し、できることで貢献したい

支援されていた人も支援する側に回れる。経験や情報を手渡す人と受け取る人の両方が喜びを得る。

POINT

1. 自分が子育て時に困ったこと、欲しかったものがよくわかる。
2. 子どもが育つ街をよくしたいと考えている。
3. 子育てによって変化した価値観で社会に関わりたい。

アイディアや専門家の意見・事例

実践者たち

Aさん

子どもが産まれてから、地域のイベントを行う仕事で会社を立ち上げました。自分の住んでいる地域で仕事をつくることができました。

Jさん

出産したあと子どもと２人きりになりつらかったんですが、赤ちゃん教室にいって友達ができたら楽しくなりました。いまは特技があるママを募って講座を行っています。

アイディア

Dさん

もともと仕事でまちづくりに携わっていましたが、自分の子どもが大きくなっていく環境をもっと良くしたい、この地域を良くしたい気持ちが強くなりました。家を建てたら、地域の子ども等に開放するスペースを作りたいと思っています。

Fさん

産後2年続いた産後クライシスを、夫とバーにいったことで抜け出せたんです。家の中はどこを見渡しても子どものものばかり。夫婦で腹を割って話すには非日常の空間と時間が必要でした。この経験を活かして、託児バーを作ってみたいと思っています。

Bさん

横浜在住の音楽家のママ友たちと最近集まるようになりました。編成もバッチリなので、いずれは地域でコンサートをしたいと思っています。

Cさん

暮らしや、子育てを通しての困りごととかを、みんなで助け合えることあるんじゃないかと。行政に頼る前の、小さい困りごとを話せるような場を自分たちでつくりたいと思っています。

インクルーシブ教育
古市 理代氏

自分が欲しかったポジティブな情報を発信

日本では障害のある子を育てる人が自分で情報を集めなければなりません。わが子のダウン症がわかって調べると、インターネットには恐怖を煽る情報ばかりが溢れていて。だから自分たちでポジティブな情報を発信することにしたのです。似た状況にある人はもちろん、幅広い人に知ってもらうことで社会が変わると信じて、外向きの情報発信を心がけています。

地域まるごと子育て“縁”プロジェクト

乳幼児教育の提供にとどまらず、ひとり親家庭・核家族の困りごとの解決、地域のさまざまな人財や資源を開発するまちづくりのモデルの創出を目指している事例。　出所｜25

4.3　インサイト分析：育児者が抱える３つの葛藤

i　育児者としての自己と一個人としての自己

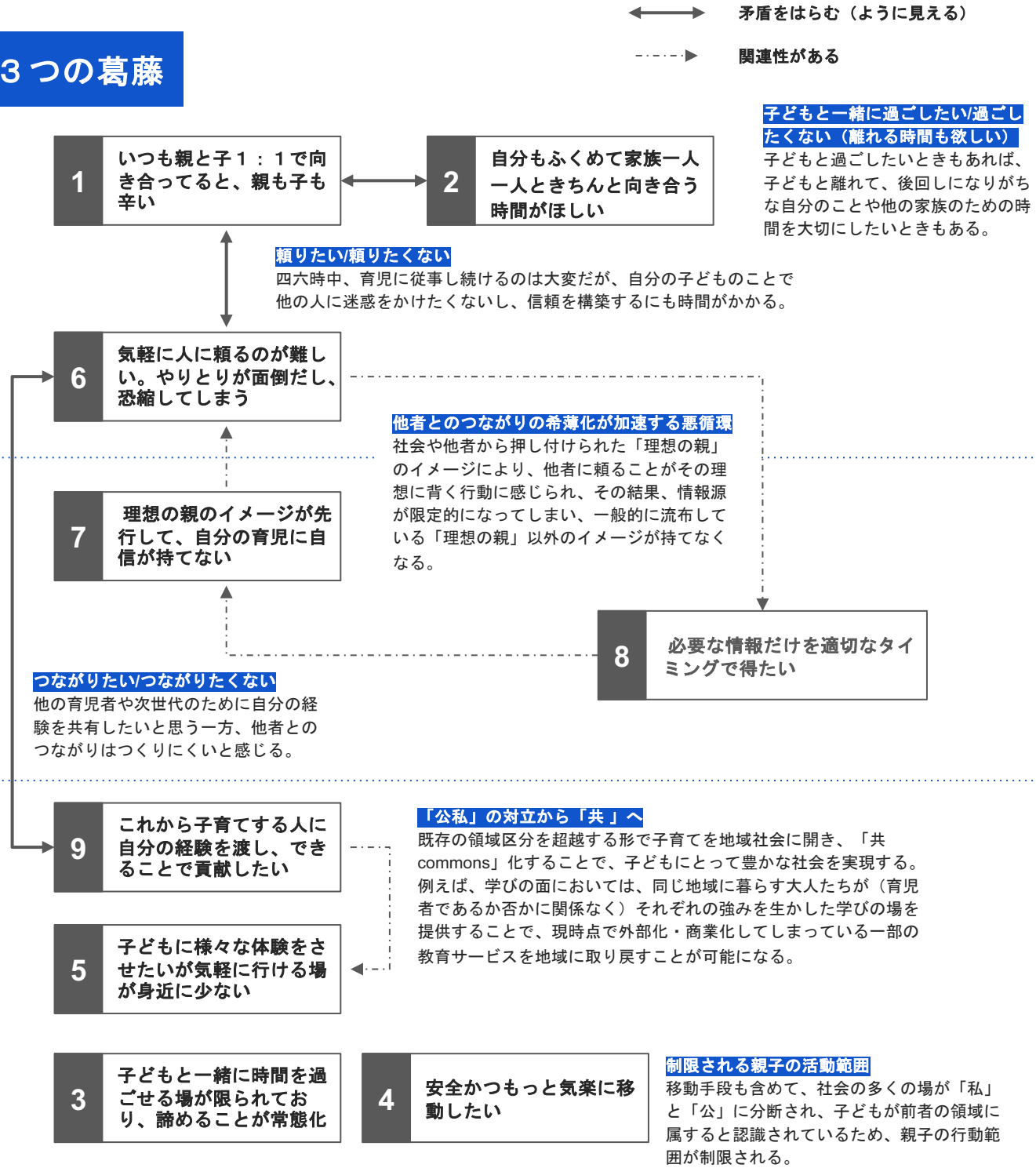
育児者は子どものニーズに応えるという責任を負っているが、その前に自分の夢や目標、趣味趣向を持った一人の人間である。育児を実践する中でこの二つの自己が「ズレて」しまい、葛藤を生むことがある。

ii　理想と現実

現代の育児者は、近代的な社会経済システムの残滓として今も色濃く残る「理想の母親像」に加え、SNSなどで発信される過度にポジティブなメッセージと自分の子育ての実際を比べることで、二重の葛藤を感じている。

iii　私(private)と公(public)

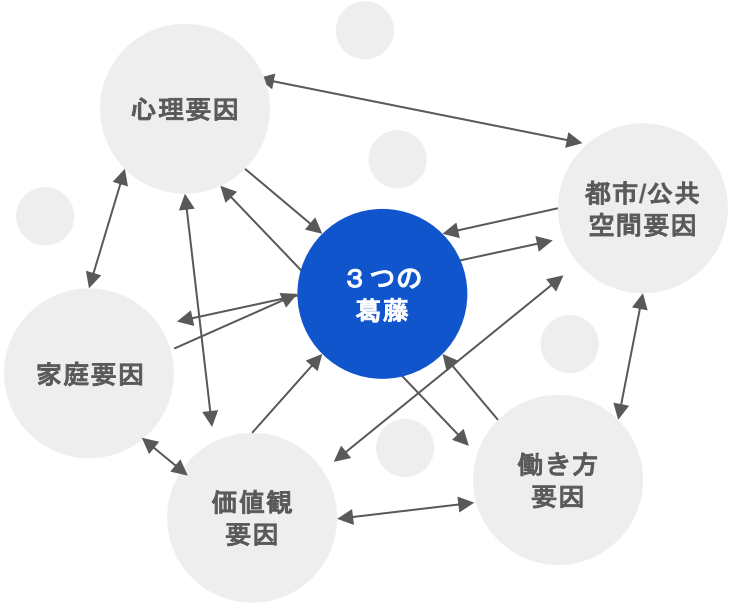
現代の日本において、子育ては個人の責任範疇であるという社会通念が根深くある影響から、（明確に子ども専用と区分されている場合を除き）多くの「公」の場では子どもの存在を想定・歓迎しておらず、親子の物理的・精神的居場所が制限されている。



4.3　インサイト分析：子育て支援の再定位

３つの葛藤の複合・複層的要因

前頁の３つの葛藤は、育児者の自己効力感や子どもとの関係性、社会一般に流布する幸せな家庭像、働き方の問題、一定の価値観に則ってデザインされた都市や公共空間の居心地の悪さなど、さまざまな次元の要因が複雑にかけ合わさって生まれている。そのため、**この３つの葛藤を解消するためには、家庭に対する福祉的な側面が強い従来型の子育て支援からもっと広範で領域横断的な施策への拡張が必要となる**。（なお、この拡張の方向性は市の中期計画2022-2025の基本戦略で目指す「テーマ１：子育て世代への直接支援」にとどまらない「テーマ２：コミュニティ・生活環境づくり」への取り組みとも呼応する。）



子育て支援から「子どものいる生活」支援への再定位

今回の調査を通して、育児者たちは子育てに対する直接支援に加え、子どもを育てる一人の人間としての生活も理解・応援してほしい、つまり、子どもがいることを前提とした生活に対する支援を要望していることが明らかになった。ついては、上で記した拡張の基本方針として**子育て支援を「子どものいる生活」支援と再定位した上で、３つの葛藤を解消する具体的な方法を検討する**ことが有効な手立てだと考える。

３つの葛藤を解消する際の関係性と力学

ii) 理想と現実

i. とiii. の施策を通して、育児者がちょっとしたきっかけで子育てに自信が持てるような社会・価値観を育む

i) 育児者としての自己と一個人としての自己

子育てとともに育児者本人の地域実践をサポートする

（p. 38参照）

iii) 私(private)と公(public)

子育ての分かち合いをサポートする

（pp. 39-42参照）

横浜市の「子どものいる生活」支援

３つの葛藤のうち、まずは「i)育児者としての自己と一個人としての自己」と「iii) 私と公」の解消を目指した具体的な施策を実践する。

その結果として、育児者の心象的な次元に起きる「ii) 理想と現実」に影響を及ぼす社会通念や育児者の自己認識の変容を徐々に促すという段階的なアプローチが有効だと考える。

i) については、オートエスノグラフィの参加者から寄せられた、特にインサイト09に関わる発言に見られた地域や子育てコミュニティへの貢献をはじめとした**子どもたちの未来を良くしたいという育児者の思いを応援するための施策**を、iii) については、**子どもの居場所が日々の生活の至るところに確保されている環境を構築する**ための施策を打つことで「子どものいる生活」を支援することが想定される。

5. 機会領域の探索

5.1　インサイト分析から見えてきた子育て支援方針　p. 38

5.2　具体的な支援施策の検討　p. 43

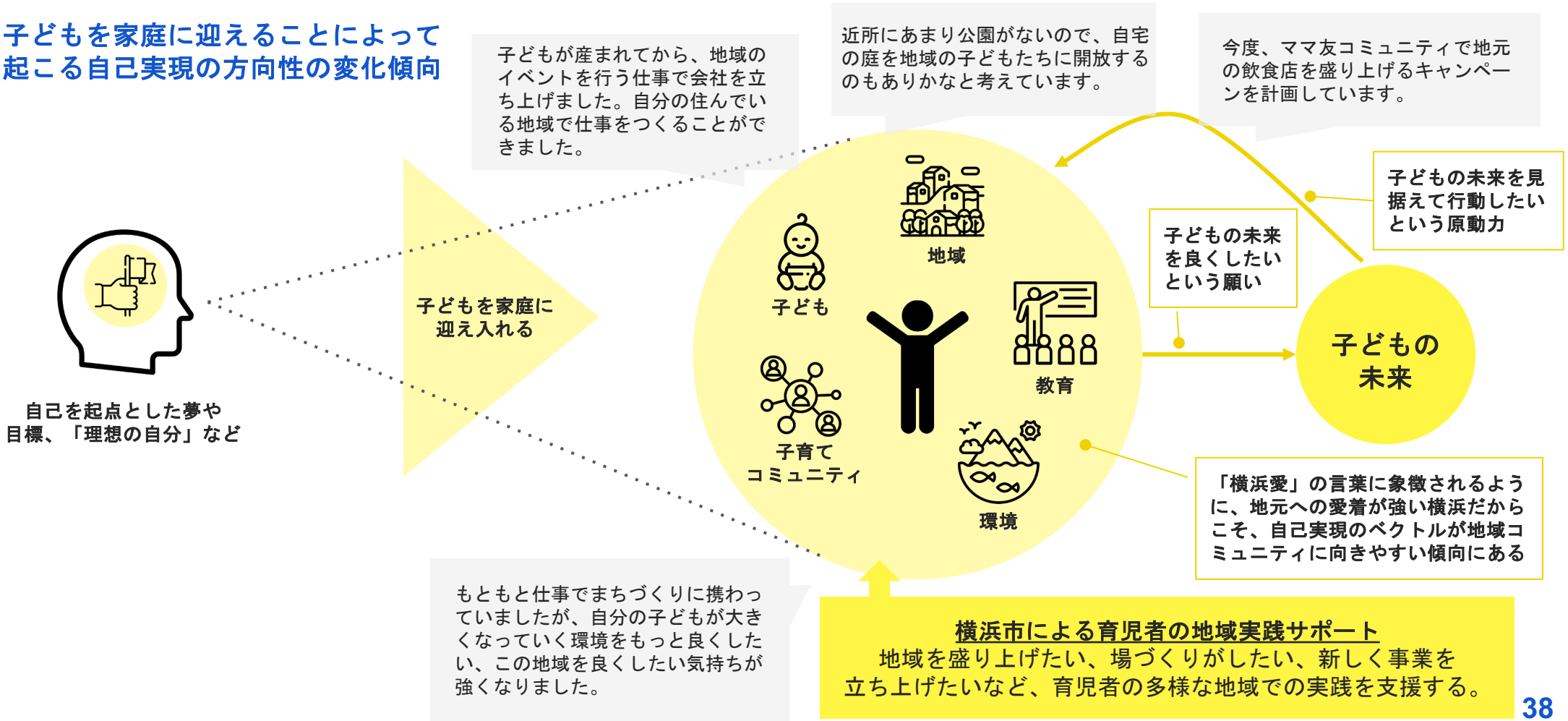
5.3　まとめ　p. 48

5.1　インサイト分析から見えてきた子育て支援方針｜「子どものいる生活」支援１

育児者の地域実践サポート

子育てに焦点をあてた政策はこれまで多くの子どもたちと家庭を支援・救済してきた一方で、**育児者が一個人として大切にしている価値観や思い、欲求**に応えるものにはなりにくかった。「もたらしたい未来」で触れた「希望」や**インサイト09**からみてとれるように、子どもを家庭に迎えることで育児者自身の自己実現の方向性が、自分自身を起点にする夢や目標から**自分の子どもの生活やその子が住む地域、ひいては次世代に引き継ぐこの世界を良くしたいという未来志向の願い**を軸にしたものへと変化すると同時に、実際に行動を起こそうという思いが強くなる傾向があることが調査から伺えた。また、**地元への愛着が強い横浜だからこそ、育児者の思いや気づきを活かし、地域での実践をサポートすることが他の市町村に比べて社会全体の底上げにつながりやすい**ことが想定される。

子どもを家庭に迎えることによって起こる自己実現の方向性の変化傾向



5.1　インサイト分析から見えてきた子育て支援方針｜「子どものいる生活」支援２

ケア概念の拡張～一部の専門家が担うケアから、誰もが関わりあうケアへ

これまでケアは、専門知や技術を持った人や家族などの身近な関係者など一部の人が担うべきもので、その他の人はかかわらないものと思われてきた。一方で、ケアに関する考え方は、社会正義や貧困問題、食糧危機や水質汚染といった人類が直面する**さまざまな〈こんがらがった問題〉に応対する中で社会の構成員全員が取り組むべき活動として拡張**してきている。この動きは日本でも広がってきており、現に、今回の調査でお話を伺った専門家の一人、西出氏は**福祉業界が抱える深刻な人材不足を解消するためにも「専門職でなくてもできるケアを地域が担っていく」**ことが必要であると話した。

地域に暮らしている人たち誰もが「プチソーシャルワーカー」になれる。

地域で病児ケアに取り組む専門職

西出 真悟

	これまでのケアの一般的なイメージ	拡張されたケア概念
ケアとは	ケアする側とケアされる側の間で完結する一過性の行為	社会の構成員の間で絶え間なく交換される持続的かつ相互作用的な行為
ケアの種類	高齢者介護、医療ケア、子育てなど負担が大きなケア	左の大きなケアに加え、ケアを必要とする人に対する気遣いや心遣いなどを含めた**小さなケア**
ケアの主体	主に専門知・技術を有する者や身近な関係者のみ	関係者や専門家だけでなく、**日々の暮らしを営む人びと全員**
ケアに対する認識	民間のサービスや公立の機関に外部化されるべき負担	必要に応じて外部化しつつ、**誰しもが平等の責任を持って**取り組むべき活動
ケアの時間軸	ケアされる側のニーズが充足されるまで	**人の一生**を通じて

参考｜26-28

5.1　インサイト分析から見えてきた子育て支援方針｜「子どものいる生活」支援２

ケアのシェア＝子育てを分かち合う

インサイト01で触れた「共同養育の可能性」や夜分に子どもを知り合いに預ける際にお泊まり会として仕立てるなどの工夫（p. 26）をはじめ、調査では参加者によって程度の差こそあれ、**子育てというケア行為を一つの家庭で完結させず、他の人たちとさまざまな形でシェア＝分かち合う様子**が伺えた。

❶「ままならない今」を他の育児者と分かち合う

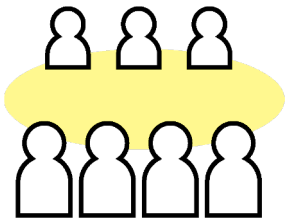
専門家インタビュー・オートエスノグラフィの双方を通じて、**予測不可能で複雑性が高い「ままならない今」を一人で引き受けることの大変さ**に関する言及が多く見受けられた。この現状は、制度的家族主義や、育児が家族に閉じられ任されっぱなしになっている社会構造に起因する。一方で、「ままならない今」を家族以外と分かち合うことで子育てにかかる負担の軽減や喜びへの価値変換に成功している事例も少なからず聞こえてきた。

「ままならない今」を分かち合うメリット

「ままならない今」を一人で受け止めるのは大変

1. 安全に子どもを見つづけることの**責任**
2. 子供の遊びに付き合う**単調さ**
3. 大変さや楽しさを共有できない**孤独感**

「ままならない今」をみんなで分かち合う



1. 安全に子どもを見つづけることの**負担軽減**
2. 子供の遊びに付き合う**時間の分散による負担軽減**
3. 大変さや楽しさが**共有できる喜び**

自発的な場づくりと子育てを分かち合う仲間の存在

区が開催する「第一子の親の会」では掬いきれないニーズに応えるべく、自発的な「ママ会」を開催している人や、「ママ」の夢を応援する機会を創出する人が複数いた。同じ体験や悩みをもつ人たちの集まりである分、共感度が高く、仲間をみつけるよい機会となっている様子が伺える。また、子どもを通じて、自分の人生では関わることがなかった人々と出会い、繋がることがある。背景や関心が異なっていても、子どもの成長に関わり、見守る同士として、互いの存在が大きな支えになる。

これから「ままならない今」に突入する人と分かち合う

インサイト09で見たように、オートエスノグラフィ参加者の多くは、子育てを通して培った知見やノウハウを伝えたいと考えていた。現状では、子どものいる人／いない人は生活が切り離されていることが多いため、子どもをもつ前に「子どものいる生活」を想像することは難しい。しかし、これから育児に関わる人が孤独に奮闘することがないように、自分の経験を分かち合える場や、経験にもとづく新たな仕組みを検討している人もいた。

5.1　インサイト分析から見えてきた子育て支援方針｜「子どものいる生活」支援２

❷「ままならない今」を育児者以外と分かち合う

自身の子どもを起点としながら、大人も子どもも楽しめて、居心地のよい地域のイベントを自ら企画・実施するAさんをはじめ、オートエスノグラフィ参加者の多くは、育児を通して得た知見や経験、新しい感覚をもとに、**育児に限定しない、多様な人の参画が望める社会のあり方を構想していた。**（参加者10人のうち8人が自分たちが暮らす地域の未来の創造に主体的に関与している、あるいは関与していきたいと考えていた。）

公園を起点に、大人と子どもの居場所が混ざり、シェアが広がる福岡のまち

福岡市　いふくまち保育園　#イベント等、人が交流する場の継続的な運営

この保育園では、園の隣の公園を愛護会として主体的に運営しながら地域の人との関わりしろを増やしている。月１回、近所のシニア約50人と園児がともにラジオ体操をして交流する。
また、この保育園には、子育て支援員の資格を取り、保育士の補助的な業務を行う「おるたなさん」という大人が複数いる。保育士でも保護者でもない、第３の存在（オルタナティブ）として斜めの関係から子どもにかかわることで、新しい風を吹かせることが期待されている。おるたなさんの年齢も幅広く20-70代、アーティストやヨガ・インストラクターなどバックグラウンドも様々。親や保育士だけではない、多様な思想や経験を持つ大人と日常的に関わりあうことは、子どもにとって大きな刺激となる。

出所｜29,30

路地でお店で、大人と子どもの居場所が日常的に混ざる神戸市長田のまち

神戸市　長田　#子どものいる生活の体現

専門家の小笠原氏がインタビューの中で語った神戸市長田の多様な属性の人びとが、施設や拠点から路地にはみ出して子育てを分かち合う風景は、まさに前述の「子どものいる生活」を体現するものであった。
戦前から多様な文化・背景の方が暮らし、阪神・淡路大震災からの復興を遂げたまち、長田。車が入れない路地空間では子どもたちが遊び、商店や銭湯では赤ちゃんから高齢者まで多世代が日常的に触れ合う。

出所｜31

5.1　インサイト分析から見えてきた子育て支援方針｜「子どものいる生活」支援２

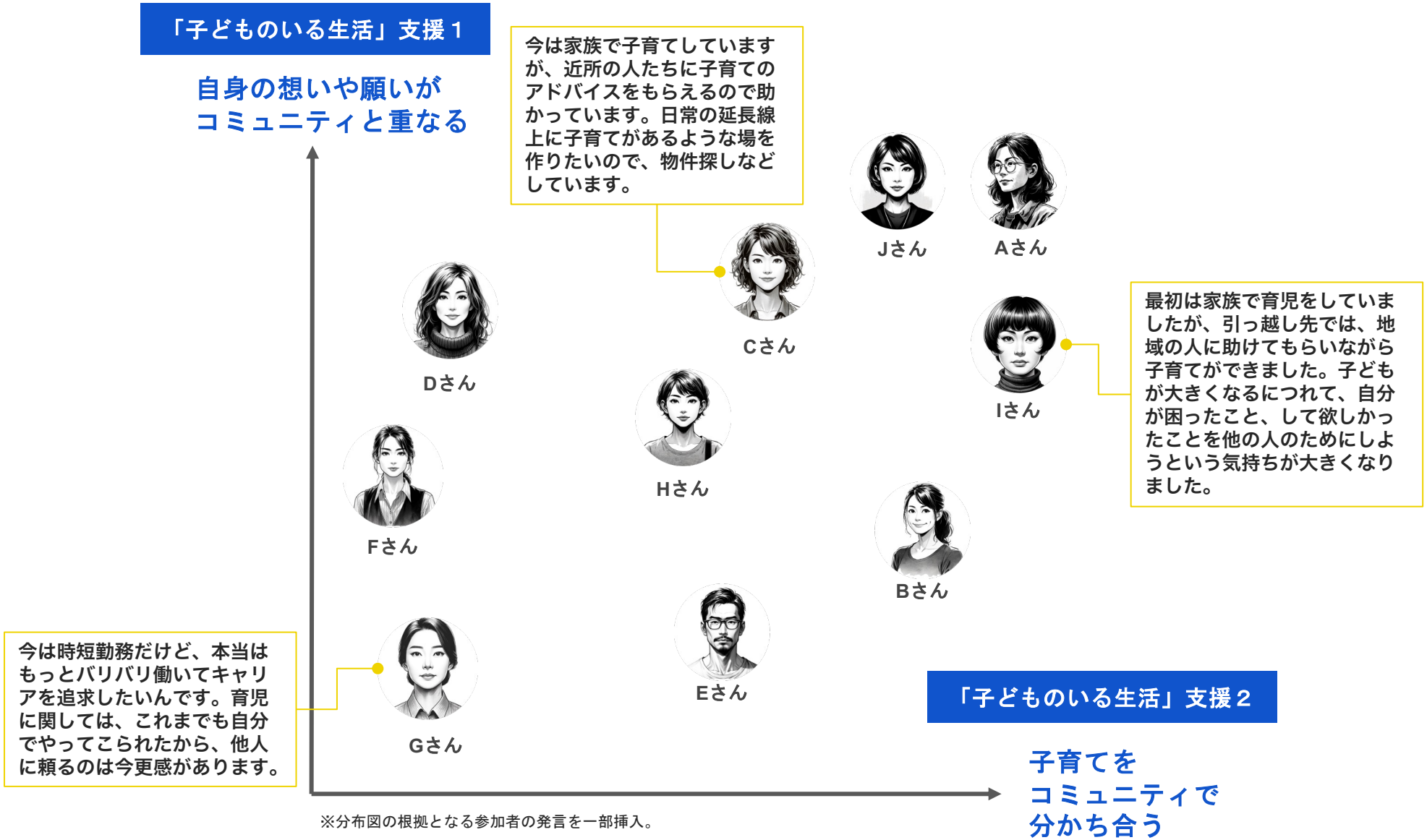
上記の通り、子育ての分かち合い方には、分かち合い先によっていくつかのパターンが存在する。子育てが当たり前のように分かち合われる社会の構築を推進するには、これらのパターンごとに分かち合いの主体と各自が持つニーズを把握した上で、支援の方法を考案・実施する必要がある。

		誰が分かち合うのか	ニーズ
1)	「ままならない今」を他の育児者と分かち合う	現在育児をしている人同士	子育ての身体的・精神的な大変さを軽減したい
2)	「ままならない今」を育児者以外と分かち合う	現在育児をしている人	子育ての身体的・精神的大変さを軽減したいのに加え、子どもに多様な経験をさせたり、社会性を身につけさせたい
		&	
		現在家庭に子どもがいない、欲しいと考えていない人	地域の子どもたちの成長に関わりたい、自分の強みを自分の住んでいる地域で生かしたい
1)と2)の間	近い未来に「ままならない今」に突入する人と分かち合う	現在育児をしている人	子育ての経験を通して知見やノウハウを伝えたい
		&	
		これから子どもを家庭に迎え入れようと考えている人	子育てのことについて知りたいが、子育てと銘打っている場には行きにくい

横浜市による子育ての分かち合いサポート
子連れの親子に対するちょっとした心配りから、地域に開かれた子育てまで、
子育てが家庭に閉ざされずに、多様な方法で分かち合える地域社会の実現を支援する。

5.2　具体的な支援施策の検討｜２つの子育て支援方針を軸に見る、オートエスノグラフィ参加者の分布

「子どものいる生活」支援１で焦点をあてた育児者の地域実践の観点と、「子どものいる生活」支援２で焦点をあてた子育ての分かち合い方という観点をあわせて、調査中に寄せられた発言をもとにオートエスノグラフィ参加者の分布図を作成した。次頁以降では、この分布に基づく具体的な支援施策を検討する。



※分布図の根拠となる参加者の発言を一部挿入。

5.2　具体的な支援施策の検討｜支援対象者の属性

行政による今後の支援方法を検討するにあたって、オートエスノグラフィ参加者の現状と要望を踏まえると、時や場合によって一つの家庭に共在しうる、子育て行為に関する３つの志向性が浮かび上がってきた。

1. 身近な人との「協育」志向

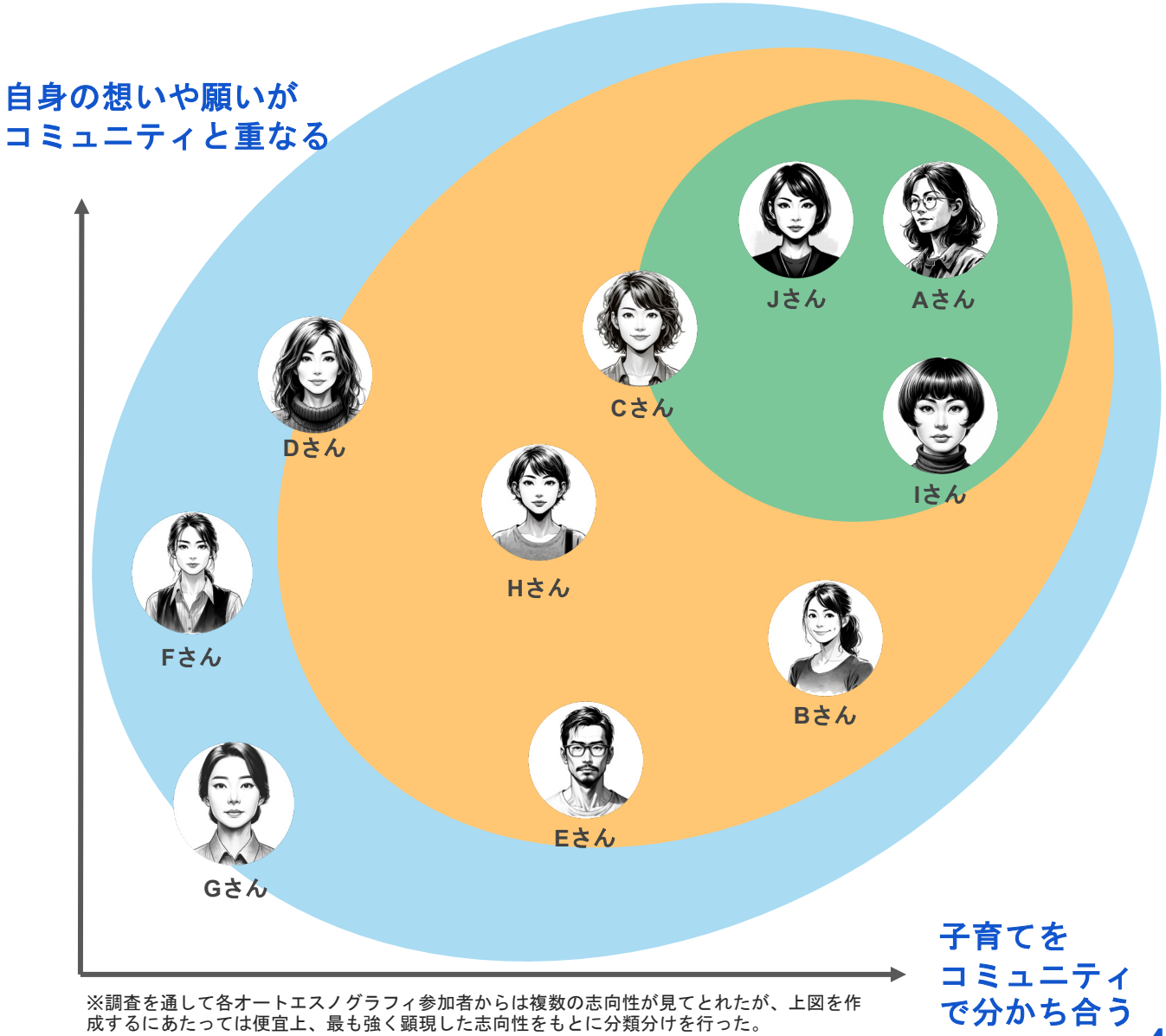
１つ目は、家族や友人などで協力しながら育児を実践する人に見られる志向性である。家族・友人関係でまかなえない要素については商業的なサービスを利用することもあり、身の回りの子育て支援の拡充を願う傾向にある。今回の調査でも全ての参加者に見られ、子育て行為の基盤をなす志向性ともいえる。

2. 人・地域とのかかわり希求志向

２つ目の志向性は、地域に対して、機会や必要があればつながりたい・貢献したいという想いに象徴される。子育てを通して自らの身の回りでなにかしたいと想像・構想し、内発的な動機と地域との重なりが見受けられる。

3. 地域実践推進志向

３つ目は、すでに地域でなにか実践をしている、はじめようとしている人たちに見られる志向性である。自らが地域で分かち合いの機会を作り出していることが多く、自分の願いや想いを実現するフィールドとして地域を明確に捉えている。



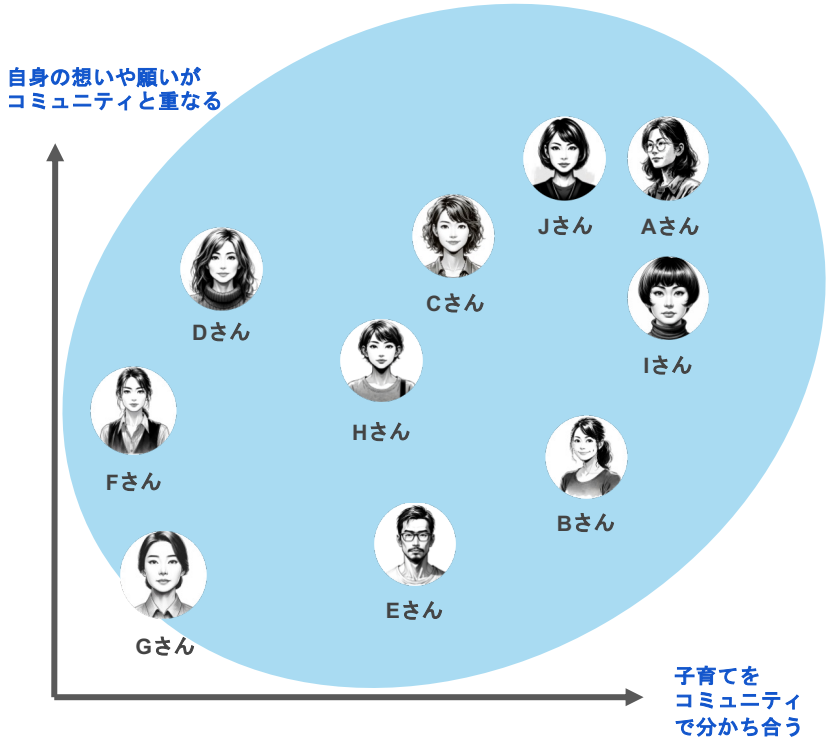
※調査を通して各オートエスノグラフィ参加者からは複数の志向性が見てとれたが、上図を作成するにあたっては便宜上、最も強く顕現した志向性をもとに分類分けを行った。

5.2　具体的な支援施策の検討｜支援の方向性１（短期）

既存の子育て支援政策の強化、改善

身近な人との「協育」志向

すべてのタイプに当てはまるのは、既存の子育て支援を、より現在の市民の生活スタイルやニーズに合わせてアップデートしていくことだ。例えば、今回の調査で明らかになった、育児者の生活動線に合わせたサービスポイントの設置や、育児者自身に「支援を必要としている」という自己認知を強要せず、大人も楽しめるような「子育て」を前面に押し出さない事業など、ニーズに合わせた強化が求められる。



参加者から寄せられた期待の声

Hさん

現代の子育てを多様な年代の人にも肯定してもらえる環境だと、みんな楽しく子育てできるのではないかと思います。

Gさん

横浜は自分が生まれた街だし、基本的にはいいなと思うけれど、もっと自由に遊ばせられる広々した場所があるといいなと思います。

Cさん

子育て支援センターだと親があまりそそられないので、もっと親がやりたいことを楽しむためのサポートもあると嬉しいです。

施策案

- 多様な人が子育てを応援し参加できる企画の立案
- 子どもだけでなく、育児者にもやさしいまちづくり企画

- 公園等を含めた居心地の良い場作り
- 道路環境やルールの整備

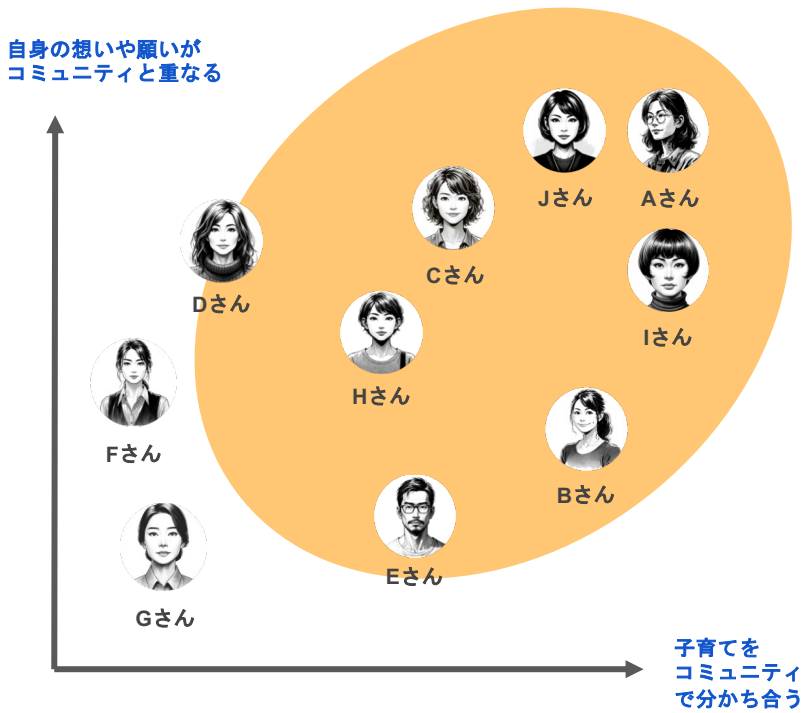
- 「子育て」の冠がつかない企画の立案
- 大人が行きたいところに子供の居場所を作るための補助制度

5.2　具体的な支援施策の検討｜支援の方向性２（中長期）

人・地域にかかわるための情報や助成金、場の提供

人・地域とのかかわり希求志向

子どもを家庭に迎えると、それまで仕事や趣味を通じて構築してきた交友関係とは異なる、子どもを起点にした地域の関係が広がる傾向にある。一方で、子育ての慌ただしさから、自身の興味関心に合致した活動やコミュニティにアクセスするための情報を得ることが難しい。また、新たな活動を自ら立ち上げようとする際には場所の手配やネットワーク、資金がハードルになることも多い。行政支援として、コミュニティへの参加や、活動の新規立ち上げに関わる積極的な情報・ネットワークの提供、またこういった実績がない市民のはじめの一歩をサポートする事業の拡充が期待される。



参加者から寄せられた期待の声

Aさん

子どもを連れていける仕事場、あるいは子どもが歓迎されるような場がもっと増えるといい。そうすると、自分ももっとのびのびと活動できそうです。

Bさん

いろんな能力を持つ人が産後、それを継続したり追求したりしづらいのが課題かなと思っている。保育園なども含め、多様なキャリア形成を後押しする仕組みがあると良さそう。

Cさん

親と子どもが一緒に楽しめる場所をもっと地域に増やしていきたいので、情報や金銭面で支援してほしいです。

施策案

- 子どもも親も楽しめる、行政施設のルールや空間づくり
- 子どもも親も楽しめる市民の場づくりへの支援

- キャリアタイプ別の母親・父親講座の開催
- 親の仕事の実態に合わせた柔軟な保育制度

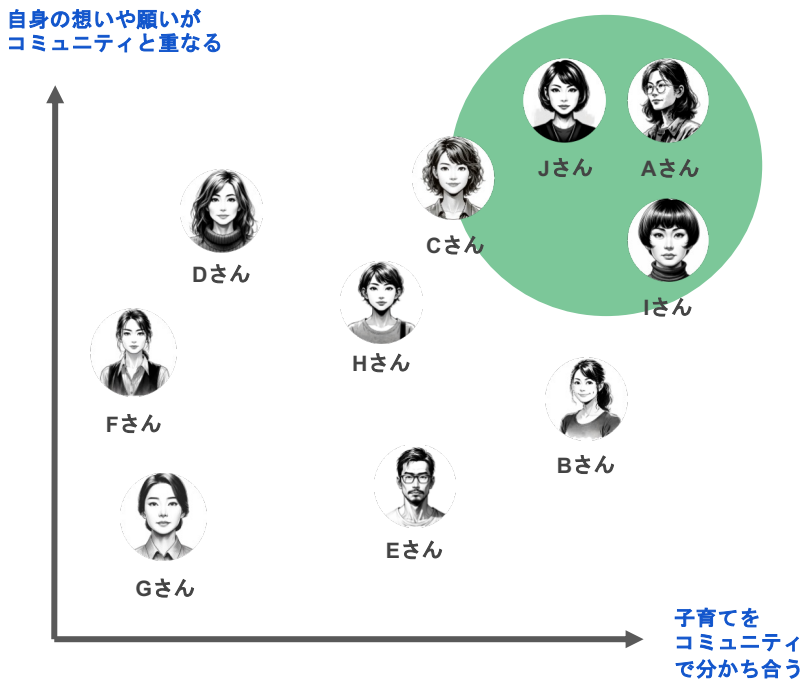
- 場所や活動立ち上げのためのサポート、補助の拡充
- LINEで関心別に情報が届く仕組み

5.2　具体的な支援施策の検討｜支援の方向性３（中長期）

セクターを超えたつながりの提供

地域実践推進志向

地域で実践している方々は、すでにさまざまなつながりを持っているが、事業者間や新しい市民とのつながりの提供を望んでいることが多い。また、行政の単独部局だけでなく、複数部局のテーマとの連携、企業や団体、市民らとの横断的な連携の可能性もある。実践者の事業とその影響を知り、事業サポートを行うことで、活動が持続・発展していくことが期待される。



参加者から寄せられた期待の声

Aさん

ネットワーキングするために、もっと気軽に場所が使えたらいいし、企業とも連携してこの街を盛り上げていきたいんですよね。

Iさん

支援施設のボランティアが少なくて人手不足で困ってます。もっと若い人たちにも興味を持ってもらいたいのですが…。

Jさん

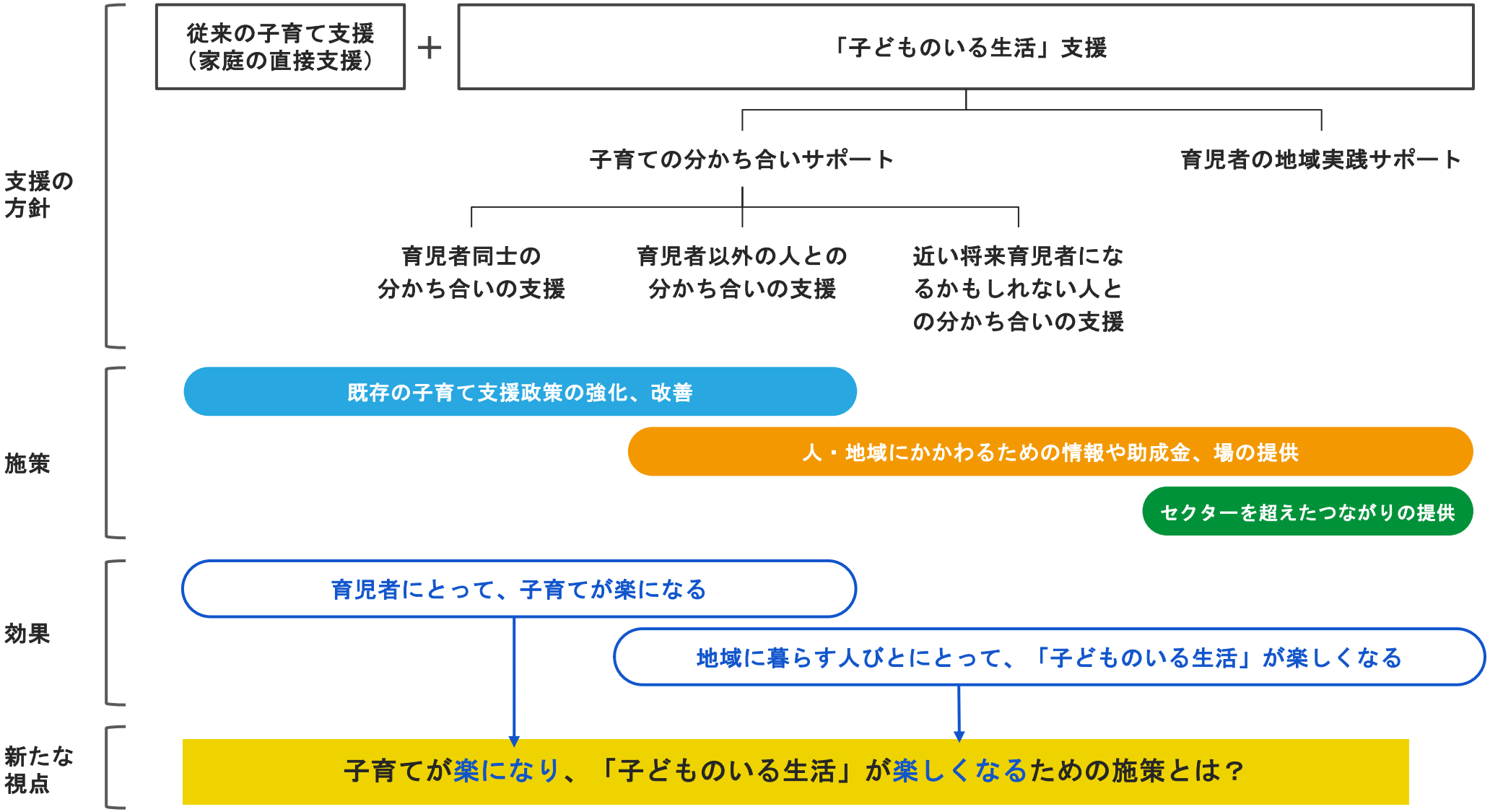
おかあさんたちの個々の特技をもっと活かしながら、子育ての大変な時間と気持ちを分かち合えるコミュニティを作りたいです。

施策案

- 企業や団体、市民とのネットワークづくりの機会創出
- 行政の既存施設を市民が活用するためのルール・手続きの簡易化、デジタル化
- 世代やセクターを超えた人も関われる企画の立案
- 多様な子どもについて知る機会の創出
- 活動の情報発信協力
- 登録コミュニティが使える場所代の減免

5.3　まとめ｜子育て支援の再定位がもたらす視点の転換

本章では、福祉的な側面が大きい従来型の子育て支援から「子どものいる生活」支援へと再定位した上で、「地域実践」と「子育ての分かち合い」の二つの支援方針を打ち立て、育児者タイプごとに具体的な施策を検討してきた。下図では、それぞれの方針や施策の位置付けを示した。また、**本調査を通して浮かび上がってきた育児者のニーズである「楽になる」と「楽しくなる」に、施策によってもたらされる効果を紐づけた**。結果として、今後、横浜市で子育て政策を立案・実行するための補助線として機能する新たな視点が明らかになった。



5.3　まとめ｜本資料の要点

1. 子育てにおける時間の問題は、節約・効率化のみでは解決できない

P. 22で示した通り、子育てには現代社会が前提とする直線的で効率化できる時間とは異なる、紆余曲折的で育児者の思い通りにはならない「ままならない今」と、子どもを起点に今後の生活や地域をよりよくしたいと思わせる「もたらしたい未来」の２つの時間性が存在する。育児者は皆、この２つの時間性を往来しながら社会のさまざまな局面と関わりつつ、日々生活している。時間の問題は、家庭内の節約・効率化のみで解決を目指すのではなく、**「空間」「仲間」「情報」などのほかの課題領域との関連も視野に入れ、社会側が子育て時間を受け入れる必要**がある。

2. 子育て支援から「子どものいる生活」支援への再定位は、子育てを家庭から地域へひらく

外部化の意味合いが強かったこれまでの「子育ての社会化」とは異なり、ケアの拡張を経由して導出された「子どものいる生活」は、**育児者同士の子育ての分かち合いを推進し、地域に住む育児者以外の人も育児に関われる余白を創出する考え方**である。重要なのは、ともすれば家庭や育児者に閉じてしまう子育てを周囲に向けてひらくと同時に、**地域側で子育てを受け止め、応えていくこと。**育児者が余計な負担や不安を感じることなく、子どもと一緒にいられる場（機会）がいたるところにある地域は、**ちょっとした心配りも含まれる小さなケアで満たされている地域であり、子育て世帯だけでなく、そこに暮らすすべての人にとって暮らしやすい地域**である。参考｜32

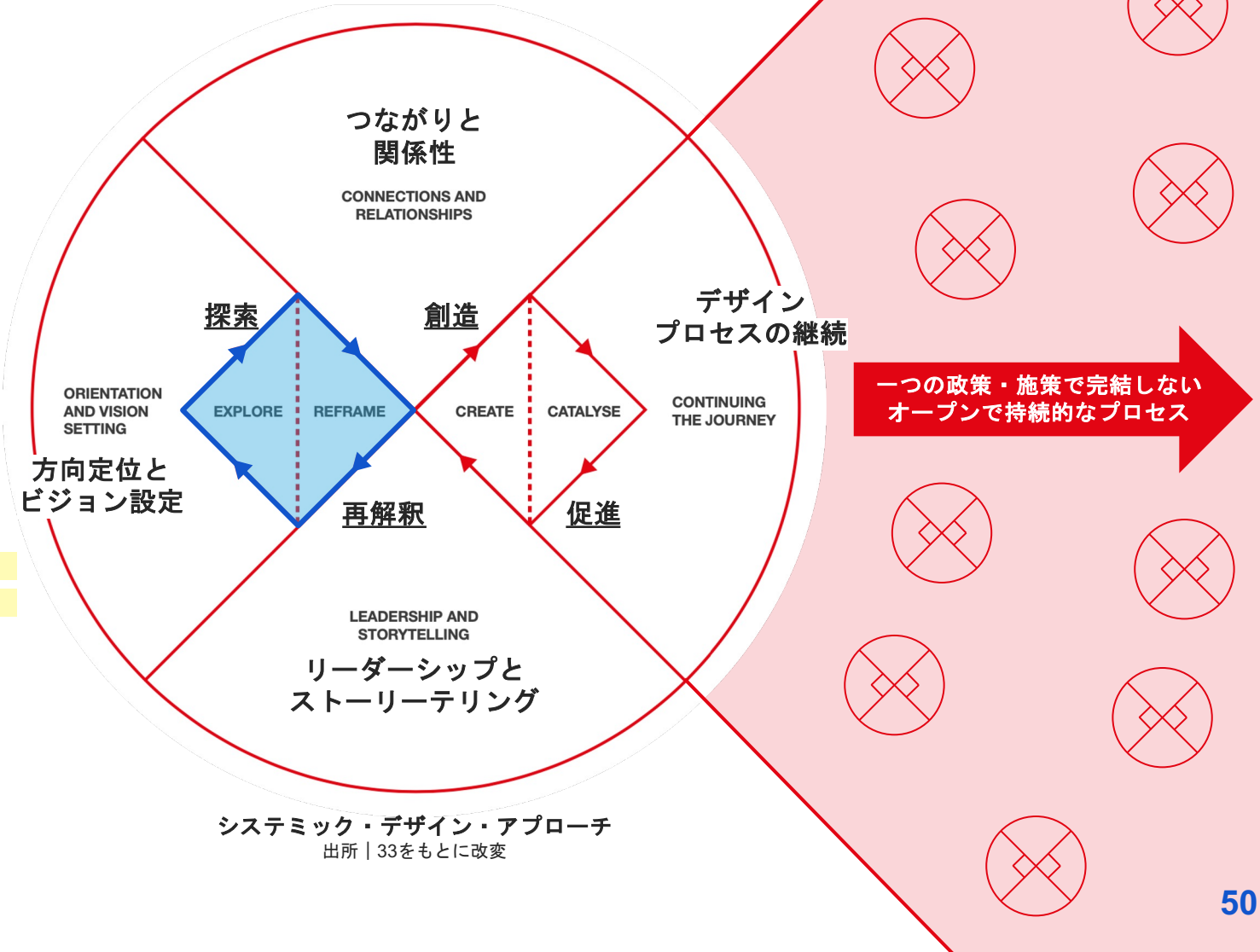
3. 子育ての大変さだけでなく、楽しさにも焦点をあてる

平成18年度版の『国民生活白書』に「育児負担」という言葉が頻発することからも伺えるように、子育ての施策を検討する際にはその大変さに焦点があたることが多い。一方で、本調査では子どもを家庭に迎えることによって、育児者が自身の子育ての経験を通して培ってきた知見やノウハウをこれから育児者になる人たちに伝えたいと思うようになったり、**「もたらしたい未来」が示す通り、子どもを起点にして日々の生活や地域をより良くしたいという思いが強くなったりすることが明らか**になった。さらに、子育てが地域にひらかれ育児者以外の人も育児に関わることによって、自己効力感を高める機会となる。**自分の好きなことややりたいことに夢中になり、日々を楽しそうに過ごす大人たちに囲まれて育つことは子どもの成長にとっても良い影響**を及ぼす。人口減少が今後、横浜市でも大きな課題になることが予想される中で、子育ての楽しさに着目した政策や施策を打ち出すことは、市にとっても有効な一手となることが考えられる。

5.3　まとめ｜調査終了後の展開について

特定の政策・施策の立案・実装にとどまらない、オープンで持続的なプロセス

今回の調査を通して導出されたインサイトを分析することで、**「子育てが楽になり、『子どものいる生活』が楽しくなるための施策とは？」という新たな視点をはじめ、横浜市の子育て政策を推進する上で補助線となる複数の仮説が立てられた。**英国の戦略的アドバイザーの役割を果たす公的機関デザイン・カウンシルが2021年に、従来のデザイン思考を進化させ提唱した「システミック・デザイン・アプローチ」の考え方に当てはめてみると、今回の調査は「探索 Explore」と「再解釈 Reframe」の段階（右図の青色の四角で示した部分）に相当し、今後はこれらの仮説をもとに子育て支援に関する政策や施策を立案・実装する段階に入る。その際、当該アプローチが示唆する通り、**一つの政策や施策の立案から実装までを個別の完結したプロセスとして捉えるのではなく、さまざまな要素が相互作用し絶えず変化を続ける動的な状況の中で、常に次の政策や施策につながるオープンで持続的なものとして取り組む必要がある。**そのプロセスにおいては、多くのPSIラボの実践がそうであるように、**特定の政治的介入がどのようなインパクトを及ぼすのかを把握し、同時に当事者の理解を醸成するためにも、なるべく市民を巻き込む形で小さく、速く実証を重ねる**ことが肝要となる。効果測定の観点から、前述の新たな視点によって浮かび上がってきた**子育ての分かち合いの度合いやそれによって育児者やそれ以外の人が感じる“楽しさ”が定量的に計測できる**ことが望ましい。



システミック・デザイン・アプローチ
出所｜33をもとに改変

6. 参考

6.1　専門家インタビューの詳細　p. 52
6.2　参考事例　p. 57
6.3　参考文献・記事　p. 62

インクルーシブ教育

古市 理代 氏

NPO法人アクセプションズ 代表理事

古市さんの活動

ポジティブな情報発信で、子どもたちの20年後を変えたい

障害のある人の社会的受容「acceptance」と周辺化されがちな人々を包摂・包括する「inclusion」を組み合わせてAcceptions（アクセプションズ）。ダウン症のある人の魅力を発信し、多くの人に知ってもらうことで、**誰もがその人らしく暮らせるインクルーシブな社会**の実現を目指して活動している。 日本で初めて東京・渋谷で開催したNY発祥の「バディウォーク」（写真左）は、12年を経て全国各地に広がっている。

参考｜34

（写真すべて古市氏提供）

いろんな子が日常にいることで、違いが当たり前になり、寛容さが育つ。多様性を自然に学ぶ機会になる。

ダウン症のある息子は幼稚園・小学校・中学校と公立の普通の学校に通いました。授業や行事に参加できるよう、先生やお友達が話し合って様々な工夫を生み出してくれました（左下の写真は、運動会のムカデ競争に、ロープを手で持つことで参加する様子）。同級生の保護者からは「あのとき一緒に参加できてよかったよね」と今も言われます。**誰も排除しない教育は、人権が守られる寛容な社会を作る基礎。いろんな子がいて、自然に多様性を学べる機会**を逃して、後になって多様性教育に予算をかけるなんて、もったいない。

私は私の人生を生きなければ。「障害児の保護者」から一人の私に戻る大切さ

息子が小学校に上がるまでの時期は、**大変すぎて記憶があまりないくらい、自分のことをほとんどしていませんでした。幼稚園に行っている間も、毎日のように呼び出される**。小学校になって初めて**「障害者の保護者」でない自分の時間**を日中数時間取ることができた時は、ものすごい解放感を味わいました。思わず、ゲーム「マリオカート」をコンプリート（笑）。それくらい、自分の時間を持てていなかった。障害の有無にかかわらず、母親はそれくらい**「人に迷惑をかけてはいけない」という緊張感**の中で暮らしているのです。

保育士起業家

小笠原 舞

神戸市長田区でゲストハウス運営

小笠原さんの活動

「なんでみんな、家族だけで子育てしているんだろう？」

保育士をへて立ち上げた、親も子ものびのび過ごせる「asobi基地」は国内12カ所に加えて上海にも広がっている。現在は神戸市長田区でバーやゲストハウスを運営し、地域に開いた子育てを実践中。参考｜35

右の写真は小笠原さんのお子さんたちもよく遊びに行っている近隣の老人福祉施設「はっぴーの家ろっけん」。子どもやお年寄りはもちろん、外国籍の人や学生など様々な属性の人たちが混ざり合う空間という。

（写真すべて小笠原氏提供）

子どもも高齢者も外国人も、誰もが一緒にいられる町。だから、安心して子どもの手を離せる

「保育士として勤務していた頃、寝る時間も、自分の好きなことをする時間もなく生活しているお母さんたちを見て、**子育てを家庭と保育園・幼稚園だけで完結させるなんて絶対無理**だと思いました。

神戸市長田に移住したのは、**路地で子どもたちが自由に遊んでいて、大人も好きなことをしている状況を見て、いろんな人がいる環境で子どもを育てたいと思ったから。**きれいな子育て支援施設があるわけでも、公園が多いわけでもありません。でも、街にたくさんある**個人商店**に行けば「昔はこうやって店番していたわ～」と子どもを抱っこしてくれる。**１歳半の娘が勝手に家から出てしまっても、近所の人が誰か見ていてくれる**ので、慌てる必要はありません。近所の学生もよく子どもたちと遊んでくれて「前は想像できなかったけれど、**今は自分たちも早く家族を持ちたい**」と言います。壁や柵で囲って他者を排除し、管理された空間とは反対に、オープンで多様だからこそ安心できる。**子どもも高齢者も外国人も誰もが一緒にいられて、いい距離感・関係性を保てる場所なんです。**

防災と同じで、子育ても事前の対策が必須！産む前にコミュニティを確保しておくべき

災害も子育ても、いつ来るかわからない。だから当事者になる前に対策しておく必要があります。**いちばん大変で、不安で、サポートが必要なのは０歳の時期なので、出産する前に、頼れる人たちが複数いる状況をつくっておくべき**です。出産後にあわててコミュニティを作っていては遅いんです。災害と違って、ある程度は予想できる。**就職の前にインターンシップをしてみるように、子育ても事前に体験**できるといいと思います。

医療ソーシャルワーカー

西出 真悟 氏

オレンジケアホームクリニック副院長

西出さんの活動

病気や障害があってもHappyでいられれば
地域全体がハッピーになる

福井県をはじめ国内３県で、在宅医療を起点とし、衣食住を含む事業活動を行うオレンジグループ。2012年スタートのオレンジキッズケアラボは、医療ケアが必要な子どもたちとその家族とともに活動し、誰もが安心して暮らせるまちづくりを目指している。

参考｜36

（写真すべて西出氏提供）

地域に暮らしている人たち誰もが「プチ・ソーシャルワーカー」に

地域の中に歩いて行ける範囲で、頼れる人がいるといいですよね。「助けてほしい」ってなかなか言えないものです。赤ちゃんを連れて一人で外出すると、お母さんはトイレにすらいけない。うちのカフェではお母さんがトイレに行っている間、スタッフが見ていますが、**赤ちゃんをみていてあげるのに専門職である必要はありません。「ちょっと見ていましょうか？」って、声をかけるだけで、ソーシャルワーカーの役割は果たせる。**限られた専門職が100人みるより、**地域に暮らしている人たち誰もが、**普通のおっちゃんおばちゃんも若い人たちも**プチ・ソーシャルワーカーみたいに**5人ずつ見てくれる方が、暮らしやすい地域に近づけるのではないでしょうか。地域の中で、実はちょっと関わりたいと思っている人を、うまく組み合わせていくことが必要かもしれません。

子育て対策と高齢者対策を、一緒にする方が可能性が広がる

「子育ての場所」と限定した場所を新たに設ける必要はなく、既存のカフェやお店が子育てへの対応力を上げて、必要とする人に伝わればいい。
場所だけでなく、人材も「〇〇ケア」と分ける必要はないと思います。
専門職の人材不足はますます深刻です。**ケアラーが足りていないのに、障害、保育、介護と縦割りで、予算や人材を食い合っていては、特に地域では回っていきません。**専門職でなくてもできるケアを地域が担っていくことは、人材の面でも必要です。

社内起業家

大原 徳子 氏

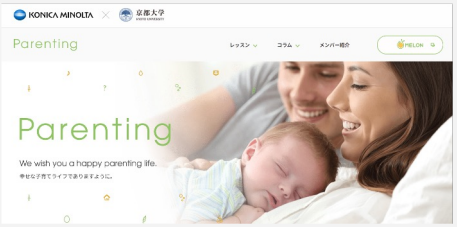
コニカミノルタ「Parenting」

大原さんの活動

壮絶なワンオペ育児→拡大家族→経験の分かち合い

コニカミノルタ勤務。２人の子どもをほぼワンオペ育児で育てる。大変な時期を、自宅にお友達親子を呼ぶ「拡大家族」で乗り切った（写真左）。仕事を続けつつ大学に通学。独学で保育士資格も取得。子育ての経験や情報を社内でシェアするコミュニティ「パパママエール」や、子育てに関する京都大学との共同研究を立ち上げる。研究の成果は同社のサービス「Parenting」として社会に還元している。（写真右）

参考｜37



（写真すべて大原氏提供）

育児不安の元凶は「孤独」。状況は悪化している

グレーゾーンを含めると８割が経験する産後うつ、妊産婦の自殺率の上昇、産後クライシスといった**育児不安の諸問題の最大の原因は「孤独」**です。大家族や親族ネットワークに支えられていた20世紀前半までや、育児ノイローゼやコインロッカー・ベイビーなど核家族化の中で育児の孤独が社会問題化しつつも、どこの家にも当たり前に子どもがいたベビーブーマー世代と異なり、2023年現在、**子育て世帯は全体の20%を下回るマイノリティ**です。**長時間労働が依然として社会の中で改善しない中、子育ての負担や不安を核家族だけで抱え、さらに家庭の中では育児者（多くは母親）が抱えてワンオペ育児**に苦しむなど、**子育てをめぐる孤独・孤立の状況は急速に悪化**しています。

参考｜38

経験や知識を次に手渡し、次をよくすることで癒される

「Parenting」は、ママたちに産前に知っておきたかったことアンケートをとり、設問を作成。回答を専門家にエビデンスベースで作成いただいたコンテンツになります。産後クライシスについても知ってほしかったので、家族の発達の項目や、支援はあって当たり前ということを教えチーム育児促進につながるような情報も入れています。**私自身が産後の大変さを産前にわかっていなかったり、育児に関する知識が浅かったりして苦労したので、もっと産前に学習しておくべきだったとの後悔**から作りました。

社内コミュニティ「パパママエール」で、子育ての経験をシェアしてもらうと、話し手に「話せて嬉しかった」と言われることがあります。私自身も、**現代の子育て環境をよくする活動を通じて、過去のつらかった自分を癒している**ような気がします。

社会学者

工藤 遥 氏

家族社会学から子育て研究

工藤さんの活動

ネウボラのような、妊娠期からの切れ目のない支援を調査

現在の主な研究課題は、妊娠期からの子育て支援利用や個別型・アウトリーチ型支援のニーズに関する実態把握、制度的課題の検討。

フィンランドの公的施設「ネウボラ」は、様々な専門家や機関を連携させながら、妊娠期から生まれた子の就学までひとつの窓口で一貫して相談することができる。出産する人・生まれた子どもの利用率は100%に近い。日本でも近年注目が高まり、各地でこれを参考にした「妊娠期からの切れ目のない支援」が始まっている。工藤さんはその実施状況も調査しており、また北海道でネウボラの実現を目指す「NPO北海道ネウボラ」の顧問も務める。

出所｜39

親には、子育てを楽しむ権利がある。

スウェーデンに留学して、夕方4時台のスーパーが職場からの帰宅ラッシュ、保育園帰りの子どもと親で混雑する状況に驚きました。**「アフター４」という言葉も聞かれます。**彼らにとって**子育ては義務ではなく権利で、男女ともに長期の育児休暇をとって楽しむ**もの。子育て政策の基本思想も日本とは根本から違いました。日本の子育て政策が**少子化対策（労働力・人口政策）であるのに対し、北欧諸国ではこどもの権利、そしてこどもと家族のウェルビーイングが重視されています。**

例えばフィンランドでは子どもが生まれると、ベビー服など子育てに必要なものがひと通り詰まったお祝いパッケージが政府から贈られます。こどもを迎える不慣れな親を**利便性・経済性の面で支え、子どもが生まれてくることを社会から歓迎されている**と感じられるような施策といえます。

親の就労のための福祉施策ではなく、
子どもの権利として、就学前の教育を保障

また、スウェーデンでは**保育事業が社会福祉省から教育省に移管**され、就学前から教育を受ける権利が保障されています。親の就労のための**福祉（施設）ではなく、こどもの教育として位置付けられている**んですね。１歳から５歳までは就学前学校（Főrskola）、６歳は就学前学級（Főrskoleklass）と呼ばれています。保護者の就労の有無にかかわらず、3歳児から5歳児は年間525時間が無料です。

もちろん、**福祉の視点も大切です。私自身も、虐待で亡くなる子どもがいなくなることを何よりも願っています。でも、そこを目指すには、特定の層だけを対象にするのではなく、子育て環境全体を社会の中で捉えて、すべてのこどもと家族を対象とした包括的な政策を打っていく**ことが必要だと思います。

参考｜40, 41

仕事と遊びの共存。子どもと大人の居場所が混ざる、みんなの工場

SHIRO みんなの工場

北海道砂川市

#働くと遊ぶ　#大人と子供の居場所が混ざる #つくり続ける

オーガニックコスメブランドSHIROは、北海道砂川市に新工場を建てる際に、まちの人たちの居場所となることを目指した。住民とのワークショップを何度も重ねてたどり着いたのは、働く場の目の前で子どもたちが遊び、大人が静かに一人でいられる場所。外の広場も住民と草木の苗を育て、植えるところから取り掛かっている。ターゲットをあえて絞らず、誰もがいられる居場所をつくろうと、オープン後も試行錯誤を続けている。

出所｜42

寺子屋、介護施設、ランドリー、
コロッケと大きな木が人を混ぜる、地域の文化拠点

春日台センターセンター

#福祉施設 #寺子屋 #高齢者と子ども #飲食 #ランドリー

神奈川県愛甲郡愛川町

高齢者や障がい者向け福祉サービス、寺子屋、コインランドリー、コロッケ屋等を擁する地域共生文化拠点。小規模多機能の介護施設と小上がりは土間だけで隔てられ、子どもたちは自由に行き来し、毎日午後になると施設前の広場が子どもたちで溢れる。コロッケを買いにくる人、ランドリー利用者、ランドリーの明かりで夕方まで遊ぶ子どもたちが混ざる拠点。

出所｜43,44

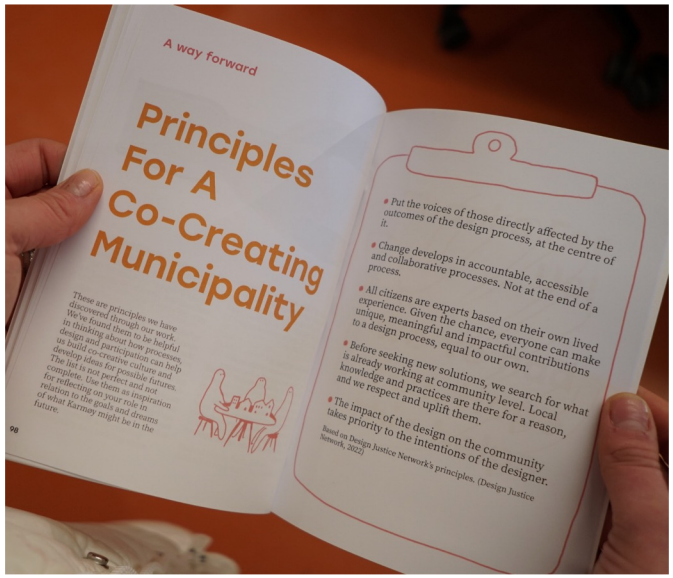
ノルウェーの小さな町のティーンエイジャーが自分達でつくる居場所

ユースセンター 🇳🇴

#中高生　#居場所　#自分でつくる

ノルウェー・カルメイ

ノルウェーの北西部の小さな町・カルメイは、人口４万人。漁業が主たる産業で若者はバイトに奔走するため、居場所のなさや好きなことを探求する場の不在、男女の雇用格差などの問題がある。D-box（公共サービス変革のための国立センター）のサービスデザイナーと、オスロ建築デザインスクールの学生が街に入り、地域のティーンが中心になって、共同で空き物件を改装しポップアップのデザインスタジオを立ち上げ、会期終了後は運営を地域の若者に委託。ティーンたちが自分たちの未来をつくるユースセンターとして機能している。



遊休公有地を市民が自ら公園につくり変えることができるツールキット

Park UP by Plan B 🇹🇼

#装置　#モジュール　#自分たちでつくる

台湾・台北

台北市内に存在する約12,000ヶ所の面積50m²以下の遊休公有地を、市民に開いた公園として作り直すデザインプロジェクト。サステナビリティにも考慮した公園モジュールを用いることで、近隣住民と協働しながら地域ごとのニーズにあった公園を実装できる。

出所｜46

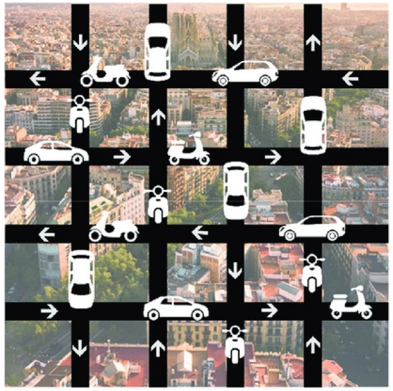
道路の使い方を市民が決め、街の中の人間と車の占有率を逆転する

Superblock 🇪🇸

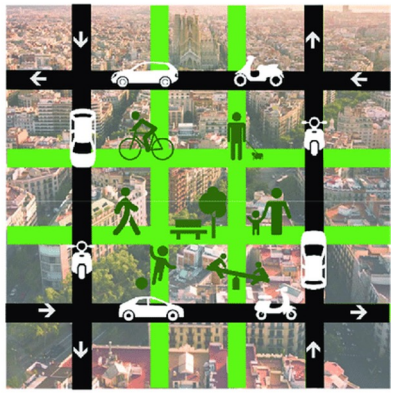
#政策　#交通施策　#公園　#自分たちでつくる

スペイン・バルセロナ

都市の中で、自動車によって占められていた空間を減らし、その代わりに市民の生活空間を広げることを目的にしたプロジェクト。複数の街区を一つにまとめ（=Super Block）、これまで車道として使われていた空間の使い方を近隣住民が自ら協議し、決定する。



Baseline situation



Superblocks model

出所｜47,48

1. 木浦 幹雄『デザインリサーチの教科書』（2020, ビー・エヌ・エヌ新社）
2. 英国 ALL GOV UK blogs “Public Policy Design”. https://publicpolicydesign.blog.gov.uk/2022/11/17/untapped-potential-from-design-research-for-public-policy/（参照 2024-2-15）
3. 2018年9月30日時点のMindLab 公式ホームページ（以下HP）より. Internet Archive Wayback Machineよりアクセス. https://web.archive.org/web/20180930155846/http://www.mind-lab.dk/en. （参照 2024-2-15）
4. Helsinki Design Lab 公式HPより. https://www.helsinkidesignlab.org/ （参照 2024-2-15）
5. TACSI 公式HPよりhttps://www.tacsi.org.au/（参照 2024-2-15）
6. UK Digital Sevices 公式HPよりhttps://www.gov.uk/government/organisations/government-digital-service（参照 2024-2-15）
7. PDIS公式HPよりhttps://pdis.nat.gov.tw/en/（参照 2024-2-15）
8. PUBLIC POLICY LAB 公式HPよりhttps://www.publicpolicylab.org/（参照 2024-2-15）
9. in with forward 公式HPよりhttps://www.inwithforward.com/（参照 2024-2-15）
10. 英国 ALL GOV UK blogs “Public Policy Design”公式HPよりhttps://publicpolicydesign.blog.gov.uk/2022/11/17/untapped-potential-from-design-research-for-public-policy/（参照 2024-2-15）
11. 『21世紀家族へ　家族の戦後体制の見かた・超えかた 第4版』落合 恵美子（2020,有斐閣）
12. 育児のストレスフリー化『毎日できる3つのこと』タニタヘルスリンクよりhttps://www.karadakarute.jp/hlp/column/detail/477（参照 2024-2-15）
13. 笹川拓也『地域社会における子育て支援の現状と課題— 子育て支援制度の変遷と子育て家庭の現状について —』https://kwtan.repo.nii.ac.jp/records/251（2014,川崎医療短期大学紀要 34号:13~18 ）
14. 出生数及び合計特殊出生率の年次推移 平成30年版少子化白書より https://ippjapan.org/archives/1330（参照 2024-2-15）
15. 横浜市
16. 東京新聞 2022年5月5日子どもに決定権はない、だからこそ意見聞いて」国連子どもの権利委委員長、大谷美紀子弁護士に聞く https://www.tokyo-np.co.jp/article/175500/2 （参照 2024-2-15）
17. ジャック・アタリ『時間の歴史』（2022,筑摩書房）
18. Scott Thrift ウェブサイト https://docs.google.com/presentation/d/1DG7FmwyIch_Oq6aKkBN0rGOsHDP175s6w6cKu0frC6c/edit?pli=1#slide=id.g127dde0df13_0_41（参照 2024-2-15）
19. 中日新聞 2020年7月1日 「コミュニティナース」運営カフェ、福井に２日開店 https://www.chunichi.co.jp/article/81127（参照 2024-2-15）
20. 薬袋奈美子さん講演 「生活道路を生活の場にする“ボンエルフ”を日本にも」 https://kuruma-toinaosu.org/newsletter-selection-2023jun-how-woonerf-works/（参照 2024-2-15）
21. 多世代が集まる「大家族」の新しいカタチ。介護付き住宅「はっぴーの家ろっけん」HELPMAN JAPAN よりhttps://helpmanjapan.com/article/8161（参照 2024-2-15）
22. ＮＰＯ法人「マドレボニータ」のアンケート調査 （２０１６年８月実施）https://www.jiji.com/jc/v4?id=201810postpartum_depression0001（参照 2024-2-15）
23. 小竹 めぐみ ,小笠原 舞 『いい親よりも大切なこと ~子どものために“しなくていいこと"こんなにあった!』（2016,新潮社）
24. フィンランドの子育て支援 フィンランド大使館よりhttps://finlandabroad.fi/web/jpn/ja-finnish-childcare-system（参照 2024-2-15）
25. 古くて新しい“大家族での子育て”地域多世代交流の場を創出 未来コトハジメより https://project.nikkeibp.co.jp/mirakoto/atcl/mirai/h_vol89/（参照 2024-2-15）
26. María Puig De La Bellacasa『Matters of Care』（2017,Univ of Minnesota Pr）
27. ジョアン・トロント『ケアするのは誰か? 新しい民主主義のかたちへ』（2020,白澤社）
28. エツィオ・マンズィーニ『ここちよい近さがまちを変える/ケアとデジタルによる近接のデザイン』（2023,Xデザイン出版）
29. 福岡市「いふくまち保育園」。公園と連携してまちとつながり育ち合う LIFULL HOME’S PRESS より https://www.homes.co.jp/cont/press/rent/rent_01091/（参照 2024-2-15）
30. 写真館から保育園まで アルバス酒井咲帆の“場をひらく”地域づくり 九州ウェルビーイングメディアQualitiesより https://qualities.jp/article/albus-sakai（参照 2024-2-15）

31. 小笠原さん一家 家族note 池田家より https://note.com/ikedafamily_2016（参照 2024-2-15）
32. 吉長真子『日本における〈子育ての社会化〉の問題構造−教育と福祉をつらぬく視点から−』https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/17516（2008,東京大学大学院教育学研究科教育学研究室研究室紀要第34号）
33. Systemic Design Framework Design Council より https://www.designcouncil.org.uk/our-resources/systemic-design-framework/（参照 2024-2-15）
34. NPO法人アクセプションズ公式HPより https://acceptions.org/（参照 2024-2-15）
35. だたの宿ではありません！下町ゲストハウス「とまりぎ」@神戸市長田区、公式オープン。小笠原さん一家 家族note 池田家より https://note.com/ikedafamily_2016/n/n6c16cffc5314 （参照 2024-2-15）
36. オレンジキッズケアラボ公式HPより https://carelab.jp/（参照 2024-2-15）
37. Parenting 公式HPよりhttps://www.konicaminolta.jp/melon/parenting/（参照 2024-2-15）
38. 「子育て世帯」の割合 初めて２０％を下回る 厚生労働省調査 NHK NEWS より （参照 2024-2-15）https://www3.nhk.or.jp/shutoken-news/20230704/1000094454.html#:~:text=%E3%80%8C%E5%AD%90%E8%82%B2%E3%81%A6%E4%B8%96%E5%B8%AF%E3%80%8D%E3%81%8C%E5%85%A8%E4%B8%96%E5%B8%AF,%E6%98%8E%E3%82%89%E3%81%8B%E3%81%AB%E3%81%AA%E3%82%8A%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82
39. NPO北海道ネウボラ　公式サイトより　https://hokkaido-neuvola.com/（参照 2024-2-15）
40. 佐藤牧子「子どもたちの多様性が生かされる幼児教育・保育を目指して—スウェーデンの視察を通して考える—」人と教育：目白大学教育研究所所報14号、2020 https://mejiro.repo.nii.ac.jp/records/1692 （参照 2024-2-15）
41. 水野 恵子【スウェーデン】充実した社会保障制度に支えられるスウェーデンのECEC（第5回ECEC研究会講演録４）https://www.blog.crn.or.jp/lab/01/96.html（参照 2024-2-15）
42. SHIROの新たな拠点「みんなの工場」が北海道砂川市に2023/4/28(金) オープンします　SHIROメディアより https://shiro-shiro.jp/topics_detail.html?info_id=1317（参照 2024-2-15）
43. グッドデザイン2023 春日台センターセンター　グッドデザイン賞より https://www.g-mark.org/gallery/winners/20473（参照 2024-2-15）
44. 調査者撮影
45. Einar Sneve Martinussen & Joakim Formo撮影
46. Park Up公式サイトより https://www.parkup.tw/ （参照 2024-2-15）
47. Mark J. Nieuwenhuijsen, Environment International,Science Directより https://doi.org/10.1016/j.envint.2020.105661 （参照 2024-2-15）
48. Centre de Cultura Contemprania de Barcelona:public spaceより https://www.publicspace.org/works/-/project/k081-poblenou-s-superblock （参照 2024-2-15）